

楓&理沙依存&実績 『翌檜』 解除RTA

チルドレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暇つぶしに書いた作品です。

メイプルちゃんを倒す作品を見て甘えさせる作品無いかあつて思ったら無かったので走りました。

因みに参考記録なのでレギュレーションは其処まで決めてないです。

ーレギュレーションー

ゲーム開始時からスタート、実績『翌檜』を解除時にタイムマーストップ。

二つ以上のトラウマの付与の禁止。

この二つのみの緩々なレギュレーションになっているので、もしタイムが気になった兄貴はやってみてどうぞ。

メイプルちゃんをトラウマに叩き落とす東雲夕風兄貴

<https://syosetu.org/novel/2282>

92／

SR Yちゃんを無理矢理殺そうとしている東雲夕風兄貴

<https://syosetu.org/novel/2213>

53／

目次

AGI極振り	1
イベント開催	15
地底湖	29
バッドエンド【私だけのご主人様】	44
速度特化と二層開放	52
速度特化と下準備	60
速度特化と友達強化	66
速度特化と第二回イベント。	75
速度特化と銀翼	85

AGI極振り

はーい、よーいスタート。

皆倒す事に夢中で精神的に甘やかさないメイプルちゃんを徹底的に甘やかしていくRTA、はーじまーるよー！

因みに今回は参考記録として挑戦するのでかなり遅いです。

イベントも全回収するんだから当たり前だよなあ？

因みに主人公の体型等は全部メイプルに好かれる様に設定します。

身長は楓ちゃんよりも少しだけ低いくらい、身長に少しだけコンプレックスを持ち、ゲームに対して興味を全く抱かず、余り人と話さない性格（楓は除く）。

ゲームの場合は余り防御力に振らない様にしましょう。最終的にはメイプルちゃんに肉壁守ってになって貰うので下手に防御に振っていると守って貰えない可能性もあります。

最終的な目標は楓ちゃんを甘やかす：ではなく逆に甘やかして貰う事を目標にしています。

何故かと言いますとそっちの方がタイムが早いからです。 (自分の趣味じゃ) ないです。

後は走者の趣味で女縛りです。理由？VRで触ってもセクハラにならないからです。(鋼の意思)

因みにレギュレーションは説明欄に全部載せているので解説はフヨウラツ！

という訳で早速RTAにイクゾー！デッデッデッデッデッ！ (カーン) デデデデ！

――一人の少女が本を読んでいる。▽

――それをチラリと横目で見ながらも、私は本を読み進めた。▽

――そのまま小さくため息を吐くのと同時に：後ろから私よりも大きな少女が声をかける。

「なつちゃん！」

「：今日は私ですか」

「えっ。何その反応…」

「…見て分かりませんか？本読んでるんですけど」

「いやそれは見ればわかるよ?!」

「じゃあ黙っててください。忙しいですから」

はい。

早速主人公ちゃんが辛辣な言葉を吐きましたね。

…いやまあ、人と話さないとは思いましたがまさか此処までとは

…

「…そんななつちゃんに良いお話が…」

「要らない」

「…お願い一緒にゲームしよう?」

「勉強しないと駄目ですよね？私と遊んでいる暇があるんですか?」

「…う…」

—私は小さくため息を吐く。▽

—それを見た理沙が震えるのを見て…私はもう一度小さくため息を吐いてから理沙に向かい合った。▽

それとなく伝える。

↓直球で伝える。

此処は主人公の性格的に直球で伝えます。

因みにこのゲームはVRゲームなので基本的に私が喋っています。

勿論ボイチェン付きなので身バレ対策はばっちりです。

「なつちゃ…」

「…分かった。私もりつちゃんと一緒に遊びたかったし、一緒に遊ぼう?…まあ、先に勉強が先だろうけど」

「本当!?ありがとう!楓にも伝えてくるね!」

「あっはい。…へ?楓?」

—走って去っていく理沙を見ながら、私は首を傾げた。▽

—楓も私と同じ様にゲームをしない性格だが、どうやって口説き落としただろうか?▽

—そんな事を考えていると、始業のチャイムが聞こえ…私は意識を切り替えた。▽

此処で時間が飛びます。

因みに楓の事に首を傾げた理由はその方が自然だからですね。

後道具は自宅に送られています。やっぱりっちゃんもナンバーワ
ン！

さて授業が終わりましたので帰りましょうか。

基本的に無口なキャラなのでモブに捕まる事は無いですし、仮に捕まってもネームド系なので…

「あ、あの翌檜ちゃん」

聞こえなかった振りして帰りましょう。

後ろから小さく何か声が聞こえましたが無視です。『今は』ね？

基本的に甘えさせるのはまだまだ先です。つまり今百合の花は咲きません。

「ううう…：…なんでえ…」

—後ろから泣き声が聞こえた気がするが、他の人の雑談の所為で誰の声か分からない。▽

—道具はもう届いているらしいし、今日は寄り道せずに帰ろうかな

…?▽

寄り道せずに帰る。

↓少しだけ寄り道して帰る。

此処はタイム優先して寄り道せず…とも思いましたが、その前に一つだけやっておきたい事があります。

それは現実でのステータスですね。

所謂理沙ちゃんが化物な理由の一つである身体能力が何処までなのか調べます。

因みに速度と体力が一定以上無いと再送です。(5071敗)なので寄り道でコンビニまで全力ダッシュをして確かめてみます。

—久々にコンビニに寄るのも良いだろう。▽

超スピード!?

…おっ、速度が今までよりも早い！そして体力も結構ある！

これは良い記録もありますあります！

コンビニに辿り着いた時点で体力が三分の二残っていますので、此

処で大量のエナジードリンクを買っておきましょう。

因みに1/3以下ならリセット、半分なら学校に持っていく用のエナドリを買います。

—エナドリを買った時に視線を感じた。▽

面倒なミニイベント来ましたね。

これは誰かが見ているというイベントです、因みにネームドキャラの場合もありますのでその場合は諦めましょう。

それでは全力ダッシュをしながらエナドリを抱えて走ります。

—寄り道をしながら全力ダッシュをした。▽

—・・・▽

—少しだけ疲れたが、速度と体力が上がった。▽

これでオツケーですね。

それではさっさと設定しましょう。

因みに設定ですが最短のオプション設定を覚えておけば良いです。

はいオツケー、ではさっさとやりましょう。

—welcome to

此処ら辺は全部スキップします。

設定は全て初期のままです、ここら辺は慣れた設定を選択するより初期の設定に慣れましょう。

その方が時短です。

—Name

此処は入力速度を考慮してホモで。

—error!その名前は既に使われています。

あつしまった。(ガバ)

前回使ってたキャラクターネームと被っている所為で使えませんでした。

それなら取り敢えずasunaroで良いでしょう。

はいオツケーです。因みに同じ理由でレズも使えませんでした。

(特大ガバ)

武器は片手剣、何処かの黒の戦士さんも使ってた優秀な武器なんだ

からこれ以外無いよなあ!?

因みに盾は速攻で外します。理由は……

―ステータスを割り振

AGI:100

OK

はいこれでOKです。

選択し終わった後は、サブウェポン枠を外して速度を更に特化させておきましょう。

―メ

―ス

―装

―右

―初

―外

これでOKです。

それでは全力で走りましょう。

メイプルちゃんが取っていた絶対防御の代わりにスキル「韋駄天走」ですが、一定の速度のまま1時間走り続ける事です。

因みにその速度のまま走るにはそれ相応の体力が必要です。だから最初に寄り道をして走る必要があったんですね。

―『スキル【韋駄天走】を取得しました』

はいオツケー。

因みに一時間走った事の無い兄貴に言いますと、これを持っていればAGIが二倍になります。

この状態ならあの時の兄貴と違ってメガトンコインを売らなくても走って抜ける事が出来ますね。

それでは戦闘に入りましょう。

因みに最初の兎さんですが私は走って逃げます。どうせ倒しても旨味が無いので。

そのまま森に走りつつ巨大蜂に会いに行きましょう。あいつ倒してジャイアントキリング【大物 喰らい】を手に入れるのと……とあるスキルを手に入れる為

ですね。

取り敢えず両足だけで木に登りつつ、そのまま武器を構えて走り続けましょう。

このタイムだと確定で宙に浮いている蜂が居るので斬り付けます。因みにダメージですが：

HP ───────────┐

はい、ご覧の通り0ダメージですね。

ですが構わずに全力で斬り続けましょう。目指すは一秒で16連撃。

こちら辺は蜂の動き次第なのでなるべく良い行動をしてくれる様にお祈りしましょう。

毒吐きは嫌だ毒吐きは嫌だ毒吐きは嫌だ……じゃあ！突進攻撃です！

ぺっ甘ちゃん、このまま十六連撃をしましょう。

— 『スキル【連撃の心得V】を取得しました』

— 『スキル【音速の連撃】を取得しました』

はい、これでOKです。

後は追加された速度に慣れながら蜂を殺せばよいだけです。

：因みに、どうして連撃の心得Vが習得できたかというと：バグです。すね。

一秒で16連撃を与えた場合、普通のステ振りだと相手が死ぬんですけど：ダメージが0の場合だとアプデ無しの場合に限り習得出来るんですね。

はい。バグ技使用不可をレギュレーションに入れてないのはこういった理由でした。

よし、蜂を倒し終わりましたね。此処から全力で離れます。

因みに此処でのんびりしていると何故かメイプルちゃんが主人公に気付きます。どうしてなんですかねえ？

初期設定のままだからだと思っただけですけれど。（凡推理）

取り敢えず急いで離れながら、このまま【毒竜の迷宮】：ではなく【騎士王の陵墓】ですね。

：はい、皆様も片手剣を選んだ理由を察して貰えた事でしよう。アーサー君から武器を強奪します。

因みに難易度はあのヒドラ君と同等ですので、ちよつとでも掠つたら死にます。

どうして運営はこんな近場に裏ボス達を配置したんですか？（憤怒）

因みにユニーク装備の獲得方法は1VS1で完封勝利なのでさつさとやりましょう。こいつの為だけに試行回数を伸ばした走者の実力、みたけりや見せてやるよ！（8101000敗）

取り敢えず体力を温存しながら走りましょう。今はメイプルちゃんも瞑想してる時間帯なので隣を通り抜けるだけで大丈夫です。

：はい、一度だけバレた事がありますが今回は念には念を入れたのでバレませんでしたね。

という訳で無事【騎士王の陵墓】に到着しました。

道は完全に覚えているので急ぎましょう…さて皆様、このまま私が道を作っているのを見ても暇ですすよね？

という訳で…：皆様の為にい？

実績『翌檜』の獲得条件を教えましょう。

といつても単純で、『楓』と『理沙』の好感度を最大まで上げて全スチルを回収すれば良いだけです。

：勿論、一周の内に。やっぱり運営アホなんじゃねえの？（嘲笑）

因みに：勿論スチルには時間制限はあるので、もし一つでも取り逃したらリセットです。

スチルには友達、親友、恋人、調教、奴隷、嫉妬等々色々な種類がありますので、もし見たい方はワツフルワツフルと言うか諦めてゲームを買しましょう。

と言つた所で漸く辿り着きました。

以外と時間が掛かったのは道に迷つたからです。最近挑戦してないので最初忘れてました。（微ガバ）

『汝、我と』

「決闘を」

『よ』

「3. 2. 1」

『「始め」』

はい、会話は全スキップします。

此処では決闘と言ってから一音待って数えると短縮出来ます。

始めという言葉と同時に騎士王が構えるので瞬時に武器を構えま
す。

ソニックラッシュユ
ソニックラッシュ
「【音速の連撃】」

【音速の連撃】は0ダメージのまま16連撃を与えた時に取れるスキ
ルですね。

このスキルは使用すると身体が音速に耐えられる様になり、更には
AGIに音速分の速度が追加されます。

計算式はこうですね。

総速度 \parallel (340・31m/s + AGI) * 【韋駄天走】2倍 * 【大物喰らい】2倍。

合計でマツハ4で動ける訳ですね。後五倍速くなれば黄色いタコ
に追いつけます。

：どうしてこんな事になったのか？そもそも音速で動けるのが強
すぎる？じゃあお前ら突然音速手に入れたら使いこなせるのかよ！
(2敗)

因みに私は普通に使いこなせますので常に発動しても良いんです
が：流石にそれをやっていると周囲が遅くて狂いそうになるのでソ
ロでしか発動しません。

因みに目の前のアーサー君、音速で動けば楽に倒せるかというと：

『ッ！』

はい、普通に対応されます。

音速で動けば音速で返され、武器を振るえば振るった武器に攻撃が
来ます。

『お前は』

会話は全スキップです。どうせNPCなんで碌な会話になりませ
ん。

因みにNPCなんでアーサー君には油断も隙もありません、もう少

し油断してくれよ頼むよー!

…という訳で此処から速度を上げていきます。

NPCにも対応出来ない速度というのが存在します。例えば…
アーサー君はマツハ3に対応する事が出来ません。

勿論AIが強化されると対応されますが、今回は大丈夫です。まだ
アップデートのお知らせも来てないですからね。

という事で体力が1/4減りました。此処から行動パターンが変わります。

『湖』

面倒なので殴り続けます。

因みに油断していると体力は一瞬で削れます、なので回避を入れながら攻撃を入れていきましょう。

『汝』

はいこの台詞覚えて下さい。

この後少しだけ溜める動作が出ますのでダメージを与え続けます。

…3. 2. 1:GO!

『この光を持って、汝を滅ぼそう。これは我の罪であり、お前の褒美でもある』

—雷鳴が轟く。▽

システムメッセージを見てから全力で避けます。

どうせ雷が落ちる速度より音速の方が速いんです、ゲームーとしてのセンスを信じて戦いましょう。

因みに此処で攻撃するとアーサー君に雷が纏ってしまい全体攻撃で死にます。

本来は2タンクで戦う事前提なんでしょうね。

…? 2タンク前提の敵をソロで完封しないとユニークが取れない
…? ふざけるな!

『…晩鐘の調べ。刹那の輝き。騎士の誓いと約束を果たし、我も眠ろう』

来ます。

このゲームどっかのゲームの影響で剣からビームが出てきます。
もし初見で挑むのだったらこの技を見て発狂するでしょう。

地面と近くの壁…ヨシツ！

『塵も残さず眠れ！』

はい光速の一撃が来ますので何も考えずに時計回りと上下にジグザグに動きます。

もしこの行動が出来ないのなら諦めて死んでください。メイプルちゃん連れてきましたけどこの時点のメイプルちゃんだと即死しました。

因みにアップデート後は普通に防御貫通しますのでメイプルちゃんは溶けます。悪食？あれ悪属性無効なんですよ。

どうかあのアーサー君に悪属性は効きません、喰らった直後に本気状態になり死にます。

という事で、攻撃を避け続けた事によって幾つかのスキルが生ええました。

「…斬」

『お見事』

という事で殺します。アーサー君が何か言ってますが無視して宝箱を開けましょう。

1VS1完封勝利という事で騎士王なりきりセットを入手しました。

此方は成長する武具なのでもう変える事は御座いません。どうか武器と防具を変える手間を考えると此処でさっさと手に入れた方が良いんですよね。

―メ

―ス

―装

―左

―初

―エ

―メ

―ス

―装

―全

―初

―騎

という事で装備完了です…。

もう此処までくれば後は徹夜でレベル上げをするだけで終わりです。

学校まで近いので朝の6時までレベル上げをした後にログアウトして課題を終わらせます。

因みに内容は全部覚えているので大丈夫です。一瞬で終わらせるモードも御座いますが一時間くらい時間が飛ばされて遅刻してロスが発生するので今回は使いません。

と言った所で今回は此処まで、今回はメイプルちゃんと会う所からですね。

では諸君、サラダバ！

「…」

剣を振るう。

誰かに頼られても大丈夫なように。

「……」

何度も何度も何度も何度も何度も、剣を振るう。

地面を蹴り、床を踏み、敵を貫いては切り裂き、壁を蹴って天井を走る。

『…お見事だ。一人の騎士よ…願わくば…』

「……」

『願わくば、お前の様な騎士が…』

さつきまで戦っていた彼の言葉を思い出す。

…少しでも気を抜けば死ぬ様な激しい戦闘、互いに鎧を削った戦いの後…彼は嬉しそうに笑っていた。

「…」

それが、何故だか辛かった。

もしかしたら、共存の道もあつたかもしれない。繁栄の道もあつたかもしれない。

…でも、もうその道は潰えてしまった。

私が殺した所為で、彼は消えてしまったのだから。

【円卓の王Ⅰ】

身体に力が入る。

【孤独の剣Ⅰ】

剣から力が溢れる。

片手の剣を両手で持ち、自分の速度を活かして唯敵を斬り続ける。

【円卓の王】は周囲の生物の数が多ければ多い程全ステータスが上がるスキルで【孤独の剣】はパーティの数が少なければ少ない程STRとAGIが上がるスキルだ。

どちらも最大時の上がり幅が凄いが、ボス戦に対しては【円卓の王】は余り意味をなさない。

それでも上がり幅は凄いいけれど。

「…さよなら」

大樹を斬り伏せて私は走り続ける。

…装備の影響の所為か、かなり早く討伐出来てしまった。

30分前後だろうか？格上の相手でも倒せるのはかなり良い事だ。

「……【孤独の剣】、STRとAGIを自由に振り分ける事が出来るんだ」

そして【孤独の剣Ⅰ】で振り分けたステータスは装備ステータスじゃなくて普通のステータスになるらしい。

……成程、一応ポイントは150振り分けられるらしいから振り分けておこう。

レベルアップで手に入れたポイントはAGIに全部突っ込みつつ、【孤独の剣Ⅰ】で得たポイントはSTRに100とAGIに50入れておこう。

「…これで良いかな。後はダンジョン周回してスキルが取れそうなら取ってみて…」

小さくガッツポーズをしながら、私は狂った様にダンジョンを周回し続ける。

…誰も居ないのだから、多少音速で動いてもバレないだろう。ううん、きつと運営には見られているだろうけど気にしない。

—【侵略者】【破壊王】を手に入れました。

これで次のアップデートには【孤独の剣】シリーズの修正が来る。その場合普通のステータス欄ではなく装備の＋ステータスに変わる。るので全部STRに詰め込めば良い。

どうせ最終的には【孤独の剣V】で1000ポイント振り分けられるのだ。STR2000にすれば大抵の事は何とかなる。

…美味しい所取りのこの装備だが、勿論弱点もある。

防御力が一切ない。【円卓の王】スキルで確かに少しは上がるとは言え、それでも1だ。

…それは、あの王の戦い方を見ればわかるだろう。

王の戦い方は、仲間を前提とした戦いじゃない。あの光の一撃だって、味方がいれば撃てないのだ。

「……」

レベル上げをしながら、私は時間を見つめる。

もう六時だ、そろそろ課題をやらないと間に合わない。

音速で仕上げられればどれだけ良かっただろうとか、そもそも今日楓ちゃん達とどうやって話そうとか考えつつも、街まで全力ダッシュしてからログアウトをした。

…これで私も掲示板に乗るだろうと考えながら、私は課題を取り出して小さくため息を吐いた。

「……………んっ…エナドリ嫌い」

顔を苦痛に歪めながら、常温のエナドリを飲み干す。

…そして課題を全部書いた後に…私は一旦自動操作モードにしてからヘッドギアを外して珈琲を飲み出した。

「…ふう。やっぱり珈琲美味しいね」

頭痛に耐えながら珈琲を飲み干して、私はチェックシートを見る。

【ヤンデレは】楓ちゃんと理沙ちゃん友達大作戦！【止めてね】

—友達になろう！ □
—親友になろう！ □
—恋人になろう！ □
—嫉妬されよう！ □
—監禁されよう！ □
—奴隷になろう!?! □

どうしてこんなRTAをやっているのか、自分でも分からなかつた。

イベント開催

はい、よーいスタート。

早速ランダム要素を引かなきゃいけないRPG、はーじまーるよー！

という訳で早速イベントのお時間です。

今日は楓ちゃんと理沙ちゃんが同時に登場するスチルがあるんですが、これランダムなんですよね。

発生しやすい時間帯はありますが、確定で発生しないイベントなので此処はお祈りしましょう（五敗）

「…おはよう…」

—楓が眠そうな表情で微笑みながら挨拶をする。▽

—何時も早寝早起きをしている彼女が眠そうにしているのは少しだけ驚いたが、理沙が言っていた事から察するにゲームをしていたのだろう。▽

—ゲームに熱中するとは思わなかったので不思議に思ったが、まあ楓には楓なりのはまった理由があるのだろうと考えた。▽

「…眠いの?」

「ちよ、ちよつとだけ……」

「……ゲーム?」

「ふえ!?な、なんでわかったの!?!」

「…私も同じゲームをりっちゃんから押し付けられたから」

「ええ…まあでも押し付けないと翌檜ちゃんはしなさそうだもんね」

早速失礼だなこいつ。ゲームしない真面目人間だと思っているのか?その通りです。（設定上は）

「…ね、ねえねえ」

「何?」

「今日学校が終わったら一緒にゲームしない?」

「しない」

「…そんなあ…なんで?私の事嫌い?」

「…意地悪で言ったんじゃないかと、私速度特化にしてるから。追いつ

けないでしょ？」

一般人でも追いつけないし、そもそもカバームーブでも追いつけない速度なんだから本当に無理です。

さっさと諦めて貰いましょう。まだ一緒に組んでも旨味がありません。

：好感度が上がるメリットはありますが、仮に好感度が上がった所で上げ過ぎたらリセットですからね。

取り敢えず今は適当に返事をして好感度の現状維持を目指しましょう。

「…そっか…翌檜ちゃんも同じなんだ…えへへ…」

「……何？」

「ううん！何でもないよ！」

「…そう？なら良いけど」

—少しだけ嬉しそうに微笑んだ楓を見て、私は首を傾げる。▽

同じ極振りだから嬉しいんじゃないんですかね？（適当）

取り敢えずAGI特化という事を伝えておきながら、一歩下がって理沙の何時ものスペースを空けておきましょう。

「…あ…」

「何」

「…その、もう少し一緒におはな…」

—楓が何か喋りそうな瞬間、私の後ろから走る音が聞こえる。▽

此処で理沙から逃げる様に動きましょう。

先ず初めに足を止めずに右側に移動し、楓ちゃんと一直線になるように動きます。

そしてそれと同時に理沙ちゃんが主人公ちゃんの方に走るのと同じ時に…

「おっはようー！」

「ふえっ?!」

そのまま避けて楓ちゃんにぶつきます。

という事で一つ目のスチル、〃仲良し二人組〃獲得です。

「…あれ？」

「ど、どうして私にぶつかってくるのお…」

「まさかそう動くとは…でもあの動きは回避に使えそうだなあ…」

「勢いよくぶつかるのは危ないよ。理沙」

「…むむ」

「…りっちゃん」

二人がくつついているのを見ながら、足を後ろに運びます。

此処でコンビニがあるのがミソです。

「あつ、コンビニ行くのは…えつと…」

「今から寄ってたら遅刻しちゃうよ？ご飯なら私が分けるから…ね？」

—そう言つて二人が両手を掴んで走り始める。▽

はいスチル二枚目。〃私達が引つ張つてあげる〃ですね。

本来ならエモイイベントになるのですが、コンビニのある所で後ろに移動すると取れる不具合があります。

一応バグのご報告はしましたが今回は修正前なので遠慮なく使わせて頂きました。

現在は修正されたので再送する時は別の手段で入手したいですね。

—私としては其処までコンビニに行きたい理由も無いので別良かったのだが…▽

—結構引つ張る力が強いと、私は苦笑しながら二人に着いていった。▽

「それで？ゲームは始めたの？」

「うん！えつと昨日は…」

「…そんな事になつてるの？」

「そうだよ？」

「…じゃあなつちゃんは？」

此処は適当に誤魔化しておきましょう。

同じ極振りとか言うത്と理沙ちゃんが凄い目で見てるので。

「私は別に普通」

「…そうなの？」

「えつとね。私と同じなんだけど速度に特化してるらしいよっ」

「……まさかね」

此処は曖昧に微笑んでおきます。

因みに此処で極振りとかいうと理沙ちゃんも極振りをしようとして失敗して病む可能性が本当に高いので止めましょう。

何度極度の集中を使つて廃人になったか……正直覚えてないですね。

「……でもそっか。二人共もう始めているんだ」

「あ……その。ごめんね?」

「良いよ良いよ! 寧ろプレイヤースキルは私の方が高いんだから!」

「……ふれいやー、すぎる?」

「其処からなんだあ……まあいいや。ゲーム話のついでに色々教えてあげる」

—そう言いながら理沙は色々私達に教えてくれた。▽

—……▽

—ゲームについて少しだけ賢くなれた!▽

それでは場面をスキップしてゲームまで進みましょうか。

今日の予定だと勉強イベントやランダムイベントは発生しないので、学校フェイズをスキップして家に帰ります。

—今日はどうしようかな?

↓寄り道せずに帰る。

寄り道して帰る。

寄り道せずに帰ります。

因みに寄り道すると放課後イベントが発生する可能性もあるのでもし気になった兄貴は自分で確かめてみましょう。

時々楓ちゃんと理沙ちゃんが一緒に歩いているのとか見れますよ

?

まあ今日は何もせずに帰るんですけどね初見さん。

因みに寄り道せずに帰った後は玄関に強制テレポートされますので靴を脱ぐ準備だけしましょう。

…はい大丈夫ですね。

偶に強制イベントの所為で帰れなかったりしますが、今回は大丈夫

だったようです。

まあRTAなんでそんなガバ運發揮する事は…ナオキです。

それでは早速レベル上げを始めましょう。

今回はメイプルちゃんになるべく合わない様に、メイプルちゃんが逆立ちしてもいけなさそうな場所に行ってレベル上げを…

「君、少し良いかい？」

あ、合わない様に…

「最近噂されている女の子が居るって聞いたんだけど…君で間違いないよね？」

多分違うと思うんですけど（震え声）

…はい。レベルが上がり過ぎた事による弊害その一、ペイン君ですね。

彼はプレイヤーが強くなりすぎると持ち前の実力を試すべく挑戦しに来ます。

「…貴方は？」

「僕？…えっと、ペインって言うんだけど…」

「そう。私は翌檜」

「よろしくね。翌檜ちゃん」

「…それで、決闘？」

—その言葉に彼は小さく頷いた。▽

—どうやら彼は本気の様だ。私は別にどっちでも良いのだが…▽

↓受ける。

受けない。

此処は別にどちらでも良いです。

唯此処で目立った事によってアップデートで修正を受けます。

それによって計算式が変わって音速が4から1に下がるのですが…まあ結局変わらないので大丈夫です。

「ありがとう！今回は胸を借りる気で挑ませて貰うよ」

「別に。私も負けるかもしれないから」

「でも負ける気は無いんだろう？」

—その言葉に頷きながら、私は決闘を了承する。▽

—それと同時に視界が光に包まれ…私は何時の間にかコロッセオに立っていた▽

確かメイプルちゃんは街に居た気がするので、出会いを避ける為にも決闘には挑みましよう。

…と言つても此処まで上がるとは思いませんでした。

本来ならペインと決闘するのはイベント直前だったんですよ。画面の中の私がオリチャーやったからですかね？

まあ何処で戦つても…

「何処からでも」

「…行きます」

変わらないんですけどね。面倒なので打ち合いではなく体力を全部削ります。

因みに出す速度はかなり抑えましよう。じゃないとイベントでマークされて最終的に良い成績を叩きだせないの。

取り敢えず最初は踏み込みだけに全力を入れ、直線を走って三回斬り付けます。

「っ!？」

内一回は弾かれますが、その瞬間だけSTRに全部振り分けてノックバックを発動させます。

「…一体どんなステータスしてるんだい？」

「言ったら駄目って友達が言つてた」

「…:…:…:…:そうだね。それは僕が悪かった」

少しだけ諦めた様に言われたらチャンス。

取り敢えず速度を限界まで出して後ろに回ってから10回斬り付けましよう。

これでマツハを計算値に入れたらどうなるかが運営に伝わったので、次のアップデートまでには絶対に修正されるでしょう。

「随分と速いんだね…」

「そう。私は速度に特化してるから」

「…どうしてだい？STRに振らなきゃ、敵を倒すのに時間が掛かるだろう？」

此処は私のロールプレイの見せ所さん!?!ですね。

因みに本人はなんて答えたかも覚えていません。どうせ何時も適当に答えてますからね。

「…速ければそれだけ周りの仲間を助けに行ける。倒すのだって、平気」

「…確かに攻撃力も結構あったけど…それでも…」

「…あと一秒早ければって経験、貴方はある?」

私にはあります。(自問自答)

自己ベスト更新したと思ったら一秒越えてた時の絶望感とか、本当に辛いんですね。

「私はある。何度も何度も何度も何度も挑戦しても、越えられない高い壁。どれだけ力を出し尽くしても、届かない壁」

「……」

「だから、速くならないといけない。速度さえあれば、何も怖くないから」

ん?こんな事喋りましたっけ?まあ動画に載ってるって事は喋ってるんでしょね。

まあ唯の速度特化であればそういう不安もあるんですが…この装備なら大丈夫なんですよね。

「…君は…」

「決闘は終わった。もう帰るね」

—そうやって私はゆっくりと去っていった。▽

さて時間も潰せましたし適当にレベル上げをしましょう。

…今の時間帯だと多分メイプルちゃんは瞑想している筈なので、適正レベルのレベル上げと…必要スキルを習得しておきましょう。

取り敢えずこれからやる事は音速で分身を作る事ですね。因みにこの分身はアップデート後には習得不可になるのでこの時点で取らないとリセットです。(三敗)

後は剣の舞を習得するためにダメージを受けてもリセットです。なんで決闘したんですかねえ?

「…」

—スキル【多速分身】を習得しました。
はい。

効果は一定速度のまま三時間反復横跳びをする事です。

：因みに一定速度というのは約マツハ2、つまりアップデート後は取れない様になっています。

後は片手剣の心得V等の全員が持っているスキルの入手をしましょう。

明日明後日はお休みなので徹夜しても特に怒られません。というよりこの主人公に対して怒る存在は居ません。

—スキル【麻痺無効】を習得しました。

—スキル【片手剣の心得V】を習得しました。

—スキル【片手盾の心得V】を習得しました。

—スキル【毒無効】を習得しました。

—スキル【体捌き】を習得しました。

—スキル【攻撃逸らし】を習得しました。

はい。

因みに【麻痺無効】と【毒無効】の二つは本来ダメージを受けないと取れませんが、とあるバグを使うとダメージを受けずにこの二つを取る事が出来ます。

：それが：

—スキル【自分喰らい】を習得しました。

—スキル【発狂無効】を習得しました。

—スキル【恐怖無効】を習得しました。

はい、自分を喰らう事です。

HPドレインの技は自分に対して使うとダメージを受けないんですね。

勿論バグですからのちに修正されますが、それを知らない振りしての現状では使いまくって良いでしょう。

【発狂無効】は【毒無効】と【麻痺無効】を両方集めて統合されるのですが、先に【発狂無効】を取っておくことによって二つを取れるんですね。

因みに自分を食べまくっても【悪食】は取れません。

所でこれを見ている運営達は吐いているらしいですね。可哀想に
(嘲笑)

―クエスト【円卓への挑戦Ⅲ】を受注しました。

という事で次は【円卓の王Ⅰ】と【孤独の剣Ⅰ】の強化を行います。

このスキルは百鬼夜行と同じように何度も何度も挑めば強化が出来るんですね。

…まあ、挑戦する度に難易度がどんどん上がるんですけど。

―【円卓の王Ⅲ】と【孤独の剣Ⅲ】を習得しました。
はい。

一応最初から【円卓への挑戦Ⅴ】に挑戦できる事も出来ますが…残念ながらクリアは出来ません。

一応ダメージは通るんですが、自動回復によって相殺されてしまいます。

因みに【円卓への挑戦Ⅲ】の場合は31時間掛ければクリア出来ます。

「…はあ…はあ…う…あ…」

RTA中の私が謎の頭痛に悲鳴を上げそうになっていますが続行
します。

何処かの兄貴の様に短いRTAなら兎も角、ストーリーモードのRTAは何処かで寝ないと死ぬ可能性もあるので、もしやる兄貴が居ましたら気を付けて下さいね。

と言った所で次回はサリーちゃんがゲームに現れる所からスタートです。

イベント?…みたけりや見せてやるよ!

「…イベント。バトルロワイアル?」

「お嬢ちゃん。その様子だとバトルロワイアルは初めてなのかい?」

「うん。というかゲームも初めて」

「そうかそうか…」

お兄さんが嬉しそうに微笑みながら、バトルロワイアルの説明をし

てくれた。

…まあ実際は何万回も聞いているので知っては居るのだが、こういう地道な所で評価を得ないとのちに大変な事になるのだ。

…何敗したかは想像にお任せしてもらおう。

「それでは、第一回イベント！バトルロワイヤルを開始します！」

「……ええ……おおう」

それと同時にあちこちから歓声が聞こえ、私もそれにあやかっさく声を出した。

「それでは、もう一度改めてルールを説明します！制限時間は三時間。ステージは新たに作られたイベント専用マップです！」

倒したプレイヤーの数と倒された回数、それに被ダメージと与ダメージ。この四つの項目からポイントを算出し、順位を出します！さらに上位十名には記念品が贈られます！頑張ってください！」

「あーあー。俺が説明した事全部説明されちった」

「……うん。助かった」

「そうかい。そりゃ良かったよ」

「じゃあ出会ったら一試合宜しくね」

「……止めておく。お前は何処か怖そうだ」

その言葉と同時に私達の周りに光が現れ…次の瞬間…

「…」

私は森の中に居た。…周囲に人影はない。

と言っても此処で棒立ちしていれば数分で人が寄ってくるだろう。

「…するか」

足に力を入れて、周囲の人間を斬り付ける。

…そこら辺に居る敵は10回くらい斬れば殺せるだろう。

取り敢えず手始めに音速まで速度を上げ、適当な人間を斬り付けて全員をスコアに変えた。

「……ふう」

メイプルが居る位置は変わって無ければ廃墟だろう。

この森から廃墟はかなり近いし、今から全力で離れて荒地に移動しよう。

このままだとメイプルのヒドラに巻き込まれて死んでしまうしね。
「……でも、お話したかったな…メイプルとお話出来るの、楽しみなん
だよなあ…」

小さく口を窄めながら、私は周囲の人間を細切れにしていく。

…目指せペイン超えだ。

いや別に超えなくても良いんだけど。

「…ひっ…」

悲鳴を無視しながら、私は彼らを斬り殺す。

…そして其処から別の女性が見えたので彼女を斬り殺そうとして

…

「っ?!」

「…っ!」

…やばいネームドキャラだ。確か名前はミイさんだった気がする。

殺したら駄目だっけ?大丈夫だっけ?覚えてないけど何か殺した

ら大変な気がする。

「…っ!ば、【爆炎】!?!」

考え事をしてたらミイさんが魔法を放ってきた。

取り敢えずそれを回避しながら、私はゆっくりと息を吐いた。

「う…嘘…!?!」

「…えっと。戦う気はないって言ったら…」

【噴火】!」

駄目みたいだ。

取り敢えず全力で回避行動を取り続けながら、視界から外れた瞬間

に音速で逃げよう。

「…っ!」

漁夫狙いは速攻で潰し、最後の一撃を入れる状態でミイさんの目の
前に放り投げる。

…それに一瞬目を向けて燃やしたのを見てから、私はその場を離れ
た。

「まっ…クソっ…」

最後にその一言を聞いてから、私は漁夫で来た彼らを叩き斬りなが

ら更に奥に向かつていく。

…小さく息を吐き、漁夫を全て叩き斬ったのにも関わらず…時間は其処まで経っていなかった。

「…う…」

頭痛に耐えながらも、私は一気にとある人間の下へ向かう。

…近接に対して恐怖を植え付けないといけない人間が一人だけ居るので、そいつに対して攻撃を仕掛けないといけないのだ。

「…来たね。私だって戦えるって事、見せつけて…」

先ず初めに、彼女を三回斬り付けて傷を作る。

…これをする理由は単純に痛み慣れさせないためだ。

確かに傷自体は治るかもしれないが、心の傷までは治らない筈だ。

「……………えっ?」

呆けている間に片腕を斬って杖を落とす。

…悲鳴が聞こえるが無視だ。彼女には多重転移をさせないくらいには弱って貰わないと困る。

「た【多重…】」

それを使わせる訳には行けないので全部潰す。

取り敢えず喉を拳で殴って詠唱をキャンセルさせつつ、そのまま一気に進み過ぎる。

…一応運営も制御出来るとは思っていないだろうし、これくらいなら遅延行為や粘着行為と思われずにトラウマを追加する事も出来る。

「ヒツ…も、もうやめ…(こうさ)、降参するから…」

「……………」

—フレデリカにトラウマ【笑顔】が付与されました。

「…いや……………あああつああ?!」

さて発狂したので殺そう。

胸を一突きして、これで終わり。後は【集う聖剣】が回収してくれるので私は気にせずに笑って相手すれば良い。

悲しいけどこれ、RTAなのよね。因みにレギュレーションにトラウマの二つ以上付与禁止が無ければ更に虐めて増やしました。

「……………大丈夫かな?」

…取り敢えず大丈夫かどうかの質問だけしながら小さく歩き始める。

さっきのアレでかなり時間を使ってしまったがどうだろうか？

「現在の一位はペインさん二位はドレッドさん三位はメイプルさんです！これから一時間上位三名を倒した際、得点の三割が譲渡されます！三人の位置はマップに表示されています！それでは最後まで頑張ってください！」

残念ながら駄目みたいだ。

…という事で最終手段としてペインを殺しに行こう。

あの時の試合を考えればまだ無傷で倒せるくらいだろう。

という事でマップを確認して、ペインに向かってる奴等を全員殺してからペインの下へ向かう。

「……君は、あの時……の……？」

「お休みペイン」

はい。

マツハ4と【孤独の剣Ⅲ】のバフを使えば速攻で彼は沈むからね。ドレッド君は別に倒さなくても良いし、後はメイプルの下に向かって走るだけだ。

取り敢えず廃墟は3つくらいあるので足を使って三つ全部回る。

「…【パラライズシャウト】を確認できたし…うん。此処で間違いなさそう」

そのまま一気にメイプルの傍に向かって走りだす。

…私の足音に警戒していたメイプルだったが、私の姿を見て小さく瞬きをした後に…周囲に視線を動かしてからゆっくりと呟いた。

「……翌檜…ちゃん？」

「うん」

「…私と、戦いに来たの？」

「ううん」

「そ、そっか……良かった…」

「…戦う理由なんて無い」

「えつと…ほら、私三位なんだよ？」

「二位倒したから別に」

その言葉を聞いて驚いた様な表情を浮かべるメイプルを見て、私は少しだけ意地悪そうに微笑む。

「だから、ポイントはもう別に良い。唯メイプルって名前だから知り合いかなって思っただけ」

「そ、そっか…」

「……何？」

「ううん……相変わらず、眼中にないんだなあ……」

その言葉を聞こえないふりをしながら、私達は空を見つめて時間を唯待つ。

…一位が死んだ事によって二位のドレッドが狙われている筈だし、メイプルはもつと狙われるだろう。

取り敢えず護衛序でにスコアを貰おうと思ひ此処に来たが…

「…行くぞー」

それは正解だったらしい。

取り敢えずメイプルちゃん気付かない様にマツハで動く分身を出して相手を殲滅させる。

「終了！結果、一部一位から三位の順位変動がありました。それではこれから表彰式に移ります！」

「じゃあ私はこれで。表彰式頑張つてね」

「へ？あ、うん」

そう言いながら私はログアウトボタンを押し、そのままゆっくりと現実に戻ってきた。

…相も変わらず常温のエナドリを飲んでから倒れる様にベッドに横になって…そしてそのまま自分のヘッドギアを外して珈琲を飲む。

「……………」

焦点が定まらないが、まだ舞える。

メンテの時は何もしない数時間があるのでその時に寝れば良い。

そんな事を考えながら私はもう一度ヘッドギアを点け……次のチャート分岐を思い出しながら作業を再開し始めた。

地底湖

はい、よーいスタート。

フレデリカに突然トラウマを植え付けた最低なRTA、はーじまーるよー！

今回はフレデリカのトラウマを依存状態に変えた後に、楓ちゃんにトラウマを植え付けて依存状態に変えたいと思います。

先ずトラウマから依存状態に変える方法なんですが…主人公と話をすれば自然とトラウマが治っていきます。

その時に一定確率で依存状態になるんですが…これは好感度によって確立が変わって来るんですね。

出会いが最悪なフレデリカちゃんが依存状態になる確率は約50%なので、取り敢えずフレデリカちゃんに話しかける前に楓ちゃんにトラウマを植え付けましょう。

…因みに今回トラウマを植え付ける方法ですが、今回はバッドイベント【虐め】を利用します。

幾つかのバッドイベントは自分で操作する事が可能であり、例えばバッドイベント【虐め】はモブの目の前で噂話をすれば後は勝手に虐めてくれます。

因みに今回のトラウマは【窒息】、【水】のどちらかです。

因みに虐めによるトラウマは主人公が行くと一発で解決するのと、トラウマが一つしか付かないという弱点もありますが…特に気にしないで良いですね。

という訳で…

「最近楓、調子乗ってない？」

「確かに」

「そういえば笑う事多くなったね」

—楓に対する周りの評価が下がった。▽

—もしかしたら今日あたり何か虐めが起きるかもしれない。▽

はい。

モブの前で言ったので適当な理由で虐めてくれます。

…因みに本人の前で言うとは別のイベントに変わるので止めましよう。(三敗)

というか笑う事多くなっただけで虐めるのか…(恐怖)

まあ本来はこの時点で虐めないんだから理由がガバガバになるのは当たり前だよなあ？

という事でさっさと家に帰ってゲームをする…前に一仕事しましょうか。

「…」

—今日はどうしようかな？

楓と一緒に帰る。

↓理沙と一緒に帰る。

寄り道せずに帰る。

寄り道して帰る。

此処で虐め解決イベントを発生させない様に先に理沙と一緒に帰りましょう。

仮に此処で理沙を連れて帰らないと普通に面倒な事になります。

因みに理沙は今日からゲームが出来るのが嬉しいので誘えば理由もなく一緒に帰れます。

「え？一緒に？…うん！良いよー！」

—理沙と一緒に帰る事になった。▽

—嬉しそうに笑っている事から、今日からゲームが出来るのが嬉しいのだろう。▽

「…ねえねえ。今日から一緒に出来ないかな？」

此処は断っておきましょう。

「無理」

「へ？な、なんで?!」

「…私は速度特化にしているから」

「あ…そういうことなんだ。やっぱり楓と同じように？」

「うん。極振り…？って奴」

「…成程なあ。でも速度特化だと戦えくない？」

「えつとね。手に入れた装備が…」

—自分の情報を理沙に話した。▽

—理沙は少しだけ難しそうに考えていた。▽

理沙は通常回避盾を目指そうとしますが、此処で主人公の性格によつて攻撃方法が変わります。

と言つても絡め手を使うか、直線的に戦うかの違いしかありませんが。

「成程ねえ…なつちゃんはどうな戦闘をしたいの？」

—その言葉を聞いて、私は少しだけ考える。▽

—私はどんな戦闘を考えているんだっけ？▽

↓味方を守りたい。

敵を一匹でも多く倒したい。

敵を確実に倒したい。

仲間を回復させたい。

遠距離から倒したい。

はい、此処での選択肢は入手しやすいスキルの情報が手に入る選択肢ですね。

この選択肢の内下三つは関係ないです。

上はタンク要素…に見せて実はDPSでも取つて良い選択肢なんですよねえ。

「…ふーん。成程ね」

「駄目かな？」

「ううん。そっかそっか…因みにその仲間っているの？」

「理沙と楓を守りたい」

—私のその言葉を聞いて、理沙の頬が少しだけ朱くなる。▽

—…夕暮れだからそう見えたただけだろうか？▽

多分そうだと思いますよ。(儂い希望)

頬が少しだけ朱くなる、というのは好感度が上がったというメツセージですね。

ゲーム開始時から楓ちゃんと理沙ちゃんが一緒に居ると好感度管理が面倒臭いんです。

なので最初から好感度を上がりまくると最終的に…リセットの

可能性もありますね。

「…そ、そっか。守りたいんだ…ふーん」
「？」

「な、何でもないよ？…でも、そっか…うん！今日楓と一緒にやる予定だったけど…」

あっこれ駄目みたいですね。

此処でタイマンと一緒にゲームをすると本格的に好感度が終わるので先手を打ちましょう。

「私も楓と一緒にやる？」

「…え？良いの？」

「速度は自分で落とせばよいから。しっかりと理沙が追いつける程度に歩いてあげる」

「…ふふ。そっか？じゃあ私も全力出しちやおうかなあ？なつちやんよりも私の方がゲーム上手いし、簡単に追いついちゃうからね？」
(私の方が知識も経験もあるので追いつく事は出来)ないです。

でも此処でマウンツの取り合いをする訳にはいかないので適当に相槌をしながら帰りましょうか。

—理沙と久々に一緒に家に帰った。▽

—じゃあゲームでね！という言葉と共に走っていった理沙を見て、私は少しだけ苦笑する。▽

—そして家に入ろうとした瞬間に…

はい、家に入ろうとする時点で確定ですね。

—電話が鳴る。楓からだ。▽

—普段なら無視するかどうか迷っていたが、今日は直感を信じてワ
ンコール聞かずに出る▽

バッドイベント【虐め】です。

「…あ…ふあ…」

「もしもし楓？」

「…ひっ…嫌…も、虐めないで…下々…」

「…楓？」

今回は呼吸困難なのでトラウマ【窒息】ですね。

水だと釣りイベントが出来なかったので割とまず味だったのですが、【窒息】だったら良いでしょう。

取り敢えず虐めが終わるまで電話を繋げておき、荷物を玄関に置いてから走りましょう。

「ごめんな…:ささいー!」

そろそろ終わりなので学校まで走ります。

因みに水責めか首絞めか分からないので、虐め対策の準備はしません。

—本条楓にトラウマ【窒息】が付与されました。▽
はいOK。

これで後はトラウマを依存状態に変化させてしまえば実績『翌檜』の半分はクリア出来ますね。

ステータス【依存】は好感度に変化を与えず一方的に好意的になれるので通常プレイでも狙ってよい異常状態です。

まあその人に反した命令を繰り返すと【依存】が解除される可能性もありますね。

という事で適当に教室にやってきました。

「…あ…:あすなろちゃん…:…」

「…:…誰がやったの?」

「…:…」

「教えて。誰にやられたの」

「…:ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!」

—会話が通じない。私は手を引っ張ろうとするとその前に手を打ち払われた。▽

—…:首元には誰かの手の痕が付いている。▽

—その事に気付いた私は…:▽

↓優しく付き添う。

強制的に手を握って家に誘う。

此処は上一択です。

下だとトラウマが増える可能性があり、そのままリセットになります。

「……楓」

―私は寄り添って楓の傍に座る。▽

―その事に少しだけ楓が目を瞑るが…私は気にせずに座ったまま両手を後ろにくっつけた。▽

「楓。私の手を縛って」

「…え？」

「楓が安心できる様に、私の縄跳び使っていていいから」

―私の言葉を聞いて、楓は小さく首を横に振った。▽

―…どうやら好感度が足りなかった様だ。▽

―その事に少しだけ苦笑しながらも、楓が安心できる様に何か出来る事は無いかを考え…▽

此処でプレイ中の私は何をとち狂ったのか上着を脱ぎ始めます。

楓ちゃんが何か別の存在を見る様な目線になりますが気にせずに着を脱ぎ捨てていきますね。

馬鹿かな？（直球）

「…これで、安心出来ない？」

「……え…その…え？」

「ワイシャツには何もないし、ネクタイも付けてない。首絞める手は後ろにおいて自分のシユシユで縛った。…これも、怖い？」

―その言葉に楓が小さく首を横に振った。▽

―そのまま恐る恐る私の身体を握って、首以外に触れた後に…そのまま私を抱きしめた。▽

「…翌檜ちゃん！怖かった…怖かったよお…息できないの、怖かったの…！」

「うん…遅れてごめんね」

「いいの…良いの…！翌檜ちゃんが来てくれたから…私は…」

はい。

実績『翌檜』とは関係ないスチル “私が貴女を守るから” を取得しましたね。

此方は虐め現場を取り押さえる若しくは虐められた後にパーフェクトコミュニケーションを取ると見れるイベントですね。

—本条楓のトラウマ【窒息】が治療されました。▽

—本条楓がステータス異常【依存】になりました。▽

「…私は、翌檜ちゃんだけが居ればいいから」
はい。

此処で別れると速攻で発狂するので楓ちゃんの間を見ながら微笑みましよう。

…うん、何とかかなりそうですね。

「…ポニーテールじゃなくてその髪型も綺麗だね」

—そう言つて楓が私の髪を撫でる。▽

—そしてそのまま私の上着を着せてくれるのと同時に、嬉しそうに楓が私のシユシユを手から奪つて微笑んだ。▽

—…そして楓がシユシユをポケットに入れた。見なかつた事にしておこう。▽

まあこれはこれで良いです。

依存状態になると好感度が上手くみれません、流石に次のイベントが発生する程度の好感度はあるでしょう。

—と言つた所で今回は此処まで、後はゲームを垂れ流しながらお話をしましょう。

では諸君、サラダバ！

「かえ…：…つと、此処で名前を言うのはご法度か。という事でやつほーメイプル！後…：…なつちゃんはなつちゃんのままなんだね…：」

「うん。そうだよ！つちや…：。サリー？」

「どつちでもいいよ？所でメイプルはどうしてそんなに近いのさ」

「えへへ…：ちよつとあつて…：ね？翌檜ちゃん…：♪」

—そう言いながらメイプルが嬉しそうに手を握りしめる。

…そのまま抱きしめるメイプルを見て少しだけサリーが私の方に目を向けるが…：私は気にしないでと微笑んだ。

「…まあ良いけど。そういえばなつちゃんは一位で、メイプルは三位何だっけ？」

「そうだよ。—と言つても貰えたのはメダルだけだったけど」

「私もそうだね」

「…それで？メイプルは何処に行きたいの？」

その言葉と同時に、メイプルは少しだけこっちを見つめる。

私は気にしない様に手を振った後に微笑むと…メイプルは小さく頷いてから喋りだす。

「これから装備を作りたいんだけど…その為に地底湖に行かなきゃいけないくて…」

「地底湖か…ふむふむ…」

サリーが小さく頷きながら考えているのを見ながら、私は小さく首を傾げた。

それを見て嬉しそうに微笑んだサリーが…

「それなら、私に任せて！いい考えがあるから…」

私を見ながら嬉しそうに喋り始めた。

それを見て私達が首を傾げると同時に…サリーが嬉しそうに私達の手を握ってくる。

「取り敢えずメイプル！装備外して？」

「へ？…うん！」

サリーの言われた通り装備を脱いだメイプルを見ながら、私はやりたい事を理解して準備運動をし始めた。

それと同時にサリーと私が走り始め、一瞬で街の外に出始めた。

「わっ?!はやつ…」

「むー…やっぱり此処までの速度だと追いつかれちゃうのか」

「うん。因みに今ならマツハ4まで動ける」

「それは…ゲームとしてどうなの？」

「…まあ、無敵かな？」

「次回で修正が来そうだね」

実際来るのだが。

それを言った所でしょうがないので、少しだけ苦笑しながら走り続ける。

そんな下らない話をしながら走っていると、目の前から狼がやって来た。

取り敢えず剣を持って加速しつつ、三体を斬り殺してから今度は右側に移動する。

「前方から狼系モンスターが三匹！メイ…」

「終わった」

「…見えなかったんだけど…」

「うん。全力で動いたからね」

「…………絶対修正されるから、この速度に慣れない方が良さと思うよ？」

「肝に銘じておく」

私としてはさっさと修正して欲しいくらいだが。

修正後に取りたいスキルも現れるし、アップデートは早く来て欲しい。

…と言っても、どんなにやった所でアップデートの日付は固定だ。

「でもなっちゃんが居てくれて助かったよ！私だけだったらメイプルを下ろして…ってやってたからさ」

「そう？」

「うん！これからも頼むよ？」

「……………任せて」

小さく微笑みながらサリーに返事を返しつつ、私達は地底湖まで一直線に走っていく。

メイプルは何も出来ない事を憂いていたが、私達は別に気にしない。

だってこれからはメイプルに頼らざるを得ない状態になる筈だからだ。

「…ほら、頑張ろう？」

「うん…頑張る！」

「なんかメイプルとなっちゃん、距離近くない？」

「そうかな？」

その言葉と同時に、メイプルの頭が私の膝に置かれる。

…私が優しくメイプルの頭を撫でると…メイプルは嬉しそうに目を瞑った。

「…うん。めっちゃ近いと思う」

「私もそう思うよ。釣りするんだから離れて」

「…このままじゃ駄目？」

「釣り糸が絡まるから駄目」

そのままゆっくりと離れていったメイプルを見ながら、私は潜って漁を開始する。

…泳ぎ等はRTA前に練習したから大丈夫な筈だ。

湖を泳ぎながら魚を斬ってはアイテム欄に入れ、そのままゆっくりと浮かび上がる。

…【水泳I】と【潜水I】は要らないなあ…。

どうせ後でサリーが回収するスキルだし、廃棄するのも良いかもしれない。

「つと、翌檜ちゃん泳げたんだ！」

「うん。速度重視だからなるべく奥の方から取ってきた。だからまだ浅瀬には居ると思うよ」

「おお…配慮してるねえ」

「うん。一緒に泳ぐ？スキル手に入ったけど」

「…最初は釣りかな？レベル1だから釣りで経験値稼ぎたいかも」

その言葉に小さく頷きつつ、私も釣りを開始する…様に見せかけて餌の無い竿を垂らす。

釣りスキルはDEXを振っていないので手に入らないし、特に釣らなくてもバレない程度には鱗を集めているのだ。

釣れなくても文句は特に言われないし、適当に遊びながらアイテム欄を開く。

「…記念メダル」

別名第二回イベント専用金のメダル。

これを持って歩いているだけで羨望と嫉妬と敵意を籠められた視線で狙われる…ある意味タンクよりタンクしてるメダルだ。

正直今回これを手に入れる理由はとあるスキルの為なのと…一つの挑戦をする為に必要でもあった。

「……………」

「どうしたの？」

私が釣りを止めて寝転がっていると、真上から声が聞こえる。

一瞬この声誰だっけとか思ったが、さつきまで聞いていたという判断材料を思い出して小さく問いかける。

「…メイプル？」

「うん」

「釣れないから諦めて寝てた」

「そうなの？私からしたらステータスを見てた様な気がするけど…」

「…アイテム欄見た。そういえばこれくらいで足りる？」

そう言いながら私は適当に拾ってきた鱗をメイプルに上げる。

…それを見て小さく首を傾げた後に…ゆっくりと首を横に振ったメイプルを見てから小さく微笑む。

「やっぱり？」

「うん…勿論り…サリーが釣りをしてくれた分もあるし、私も頑張ってるんだけど…」

「そっか」

小さく返事を返しながら、私は小さく欠伸をする。

「ちよつと私潜ってくるー！なっちゃんはどうする？」

「…私…」

サリーに着いていく。

↓メイプルと一緒に待つ。

一人で移動する。

此処はまだサリーと一緒に居なくても良かった筈だ。

…【潜水X】と【水泳X】を取った時にスチルはあった気がするけど、本当にそうだったかは覚えてない。

後で確認しないと思いつつも、私はメイプルと一緒に待つことにした。

「そっか。分かった！後で色々教えるねー！」

「うん。待ってる」

私の言葉を聞いて小さくVサインをした後、チャポンという音が聞こえ…私達はお互い無言のままサリーを待つべく座っていた。

「…これからどうしよう?」

「お互いにスキルを探してみる?」

「…うーん」

「?」

「もう少しだけ一緒に居ていい?…ログアウトしたら、もう翌檜ちゃんに会えなくなっちゃうから…」

「そう言いながら私の身体に寄りかかるメイプルを見ながら…私はメイプルの頭を撫でた。」

「…こうなつたのは私が原因だ。」

「全部全部私の所為で、何度も何度も楓と理沙の人生を壊しては弄んだ。」

「…他にも姉妹の人生を壊しては作り替え、壊しては…」

「…つ…」

「翌檜ちゃん?」

「…ごめん……なさい」

「何週目か分からない。」

「けれど私はこの空き時間を、レベル上げの為に使わず謝る為に使ってしまった。」

「…別にこの時間をレベル上げしても結局1レベル上がるかどうかだ。」

「だから其処までロスはない。…微ロスではあるが。」

「…翌檜ちゃんが何に対して謝ってるかは分からない…でも…」

「小さく微笑んだメイプルが、私の身体を優しく抱きしめる。」

「…それをされる度に、私の心が壊れていく。」

「狂わせたのは私だと、何度も何度も刷り込まれていく気がして。」

「…私の事だったら、私は絶対許すよ。だって…私は翌檜ちゃん無しじゃ生きていけないから」

「そして壊した事を、何度も何度も教えられるのだ。」

「…そっか。ありがとう」

「ううん!」

「嬉しそうに微笑んだメイプルが、私の身体を抱きしめたまま私を押

し倒す。

…意味も理解してないのに、どうしてメイプルはそんな事をするのだろうか？

そんな事を考えながら、私はゆっくりとメイプルの頭を撫でた。

「……メ」

「翌檜ちゃんは、どうしてそんなに私に優しくするの？」

「……なんでって……」

…可笑しい。

何時もなら何やってるんだろ私って言いながら退いてくれた筈だ。それなのにも関わらず、私の上に乗ったままのメイプルはガラガラとした目をこちらに向けている。

……私の貞操が不味いのは、もう少し先だった気がするのだが……好感度上がってしまったのだろうか？

「…ねえ。翌檜ちゃん」

「……」

「虐めっ子を唆したの、翌檜でしょ？」

「っ!？」

その言葉を聞いて、私は思わずメイプルの方を見つめてしまう。

…それを見たメイプルは本当に嬉しそうな笑みを向けながら…私の頬を優しく撫でた。

そしてゆっくりとその撫でた手を首元に持ってきて……小さく微笑む。

「何でそんな事をしたかは聞かないよ？だってもう私は許したから」

「……何が、望みななの？」

「何が望み……？面白い事言うよね」

「……どういふこと？」

メイプルは嬉しそうに笑って、ゆっくりと指先で私の首を撫でた。…それは見えない首輪を弄っている様で、とても気持ちよくない。

「一つの命令だけで、許されると思ってたの？」

…メイプルは、Sだ。

それは彼女を知っている人であれば知っていても過言ではないだ

ろう。

そして彼女は……

「ねえ。翌檜」

「…何」

「陰で糸を引いていたのが理沙にバレたら、どうなっちゃうのかな？」

その言葉を聞いて私は思わず息を呑んだ。

…此処まで良いタイムで走れているのに、そんな事をされたら……
確実にリセット案件だ。

どうすれば良いのか分からない。こんなことはチャートに書いて
なかった。

「私は教えても良いんだよ？だから…教えて？どうなっちゃうのかな
？」

破綻する。

…一瞬リセットも考えたけど、これを止めたら何度もう一度リセッ
トしないといけないのか分からない。

「…」

「言えない？そうだよね…だって…」

—そんな事になったら、また始^{もう終わってしま}まつちゃうもんね？▽

その言葉と同時に、水面からサリーが浮かび上がった。

その事に小さく安堵のため息を吐こうとしたが…上手く息が吐け
なかった。

…後ろを見つめると、メイプルが嬉しそうに微笑みながら私の耳元
で囁く。

—言っちゃうよ？▽

その言葉を聞いて、私は小さく首を横に振った。

…言われたらリセットだ。でもどうすれば良いのか分からない。

「…じゃあ、一つだけ私に言っつて？そしたら言わないで置いてあげる」
「わか…分かった！何でも言うから…早く…」

「私は楓に何度でも従います」

「わ、私は……」

不味い。

普通に奴隷ルートに入ってる、このままだとあるスチルの入手条件が本当にきつくなる。

「…ねえサ」

「私は楓様に何度でも従いますー!」

「はい。よく言えました」

その言葉と同時に、メイプルが私の身体から離れていく。

…気だるげに見て見れば、どうやらメイプルが言い訳をしているらしい。

その事に少しだけ安心しながらも…

「…やっちゃった…」

特大ガバをやってしまった事に気付き…思わず天を仰いだ。

…本来なら奴隷条件を満たすのはもう少しだけ後だった筈だ。

一応その頃には好感度調整スチルを手に入れて何とかなっている筈だったのに…このままだと最悪リタイアもあり得る。

「……自己ベスト切れなかったらどうしよう…」

どうしてこうなつたと両手で目を覆いつつ、私は小さく通報と書かれたウインドウを閉じた。

……そしてゆっくりと二人を見つめた後に…

「…頑張ろう。まだ取れてない実績も取れるかもしれないし…後再走する時も役に立つかもしれないし…」

ゆっくりと両手を身体の前に出してガッツポーズをしつつ、気合を入れた。

バッドエンド【私だけのご主人様】

はい、よいいスタート。

フレデリカちゃんのトラウマを治療するのをすっかり忘れてたRTA、はーじまーるよー！（出ガバ）

早速ですが皆様にご報告があります。

前回の無言タイムから察する通り、ガバ極振りの所為で依存関係が悪化してしまいました。

なのでサリーちゃんが色々頑張っている間にも説明をしておこうと思います。

— 関係性【奴隷】

此方はステータス異常【依存】と違って関係性に効果を与える状態です。

例えばこの場合、関係性【親友】の場合でも【奴隷】に上書きされた場合一時的に好感度が上がっている様な状態ですね。

なのでこの状態だと一部のスチルの取得が難しくなってしまうます。

何故なら関係性【奴隷】というのは何かしら弱みを握られており、反抗する事が極端に難しくなってしまうのです。

…：普通のNPCなら、という話になります。

本来は操作キャラがNPCやNPCノンプレイヤーを対象にして発生する関係性【奴隷】なんです…：実はこれ、操作キャラに使われると面白い事も出来ます。

例えばサリーちゃんが操作キャラを粗末に扱ったり、メイプルちゃんが弱みを握って家に押しかけたり…：特にメイプルちゃん側の方はサリーを巻き込んで一緒に来たりしますね。

そしてメイプルちゃんとの関係性はマイとユイと会わずに居るとその関係性を引き継ぐという性質を持っています。

…：そして今回はそれを利用して、マイとユイの奴隷イベント【私だけのお姉ちゃん3】を手に入れたいと思います。

…：え？RTAならメイプルちゃんとサリーちゃんだけを見る？

……実はサリーちゃんにトラウマを付与する方法、殆ど無いんですよ。

メイプルちゃん程お人好しでもなく、かといって敵意を見せなくても一方的に敵意を向けて来るので殺意見せたら一瞬で喧嘩別れです。それに何処かの兄貴がメイプルちゃんを盾にした時もサリーちゃんはトラウマ発症しませんでしたので味方殺しも意味が無い。

精神超合金の身体能力化物……かといって幽霊ゾーンは自分から行かない……そう、とある階層以外では。

そのとある階層だと精神が弱り、依存関係を多少発生させやすいので其処を狙っていきたいと思います(32敗)

精神が極端に弱っている時、好感度の高い人間に依存する可能性が少しだけあるのでそれを狙うのが今回のRTAチャートです。

……他にトラウマの発生方法を知ってる方は教えて下さい何でもしますから!(懇願)

という事で今回のチャートだとかかなり時間が掛かってしまうのでマイ・ユイのイベントを見ても余裕なんですよね。

……但し、関係性【奴隷】に発展させる時間はランダムなので:最悪セーブアンドロードをしてでもこちらのイベントを見たいと思います。(鋼の意思)

……すいませーん。木下ですけどお……【潜水X】【水泳X】まだ時間かかりそうですかねえ?

後ちよい?じゃあ暇をしている皆様の為に……

今回スキップしたサリーちゃんの【依存】↓【奴隷】ルートのキャラクターを見ましょう。

……きっかけを見たのは、本当に偶然だった。

息継ぎをしようとして、何時もより早く浮かび上がった時に……

「……あ……はあ……」

「……ねえ。どうするの?お願い聞かないなら喋っちゃうけど?」

小さく、乱れてるなっちゃんの姿を見つけてしまった。

身体をくねらせ、小さく息を荒げ:頬を上気させているなっちゃん

はとても凌辱的で…

「がぼ、がぼぼぼ…」(なっ、なにして…)

そしてそれを見ていた楓は、何時もの優し気な笑顔じゃなくなっていた。

単純な攻撃しかしない魔物を見つめている様な目で、けれどとても愛おしそうになっちゃんを見つめている楓は…

「…ねえ。翌檜…教えて?」

「……やあ……」

「じゃあ後でサリーに言っちゃうから。あーあ、終わっちゃ…」

「ごめ、ごめんなひゃ…」

ペットの睨をしている、飼い主の様な顔をしていた。

…そしてゆっくりとメイプルがなっちゃんに口を合わせると、なっちゃんの動きがピクリとした後に動かなくなった。

「…あ……」

「どう? 毒無効でも、口の中にヒドラ入れたら大変な事になったよね?」

「……あ……あ……」

「ねえねえ。教えて? 身体の中に沢山の毒を入れたらどうなっちゃった? ……もう、サリーに触れないんじゃないの?」

「…んぐいう…ああつ…!」

「サリーだけじゃないよね? 毒耐性を持ってない人に触れたらどうなっちゃんのか…: 翌檜が一番よく知ってるよね?」

その言葉と同時に、さつきまで動かなかったなっちゃんの身体が震え始める。

…: 同時に、メイプルの視線が一瞬こつちを向き…: 口だけで伝えてきた

—無垢ななっちゃんを墮とすなら。前しか見てないなっちゃんの視線を向けさせるなら…: 今だよ?

最初はその言葉を無視して、湖の中に潜った。

けれどその言葉は脳の中に焼き付いた様に残り続けてしまった。

なっちゃんが私を見てくれるんじゃないか。ゲームの中の私では

なく、唯の私を求めてくれるんじゃないか。

だってゲーム初心者メイプルの楓ですら、彼女を攻略出来たんだ。
なら……ゲーム支配の私だって出来る筈だ。

「……アハっ……」

―白峯理沙がステータス異常「依存」になりました。▽

何かが壊れた音。

それが自分の精神だと気付けなかったのは、きっとゲーム支配として失格だったからなのだろう。

…でも、それでも良かった。

「…なっちゃんが手に入るなら、私は何だって良い」

友達？親友？…見てくれないなら他人と一緒にだ。

恋人？奴隷？…見てくれるなら何だって一緒にだ。

気付けば私はなっちゃんを手に入れたくて手に入れたくてしようがなくて。

結局私は、楓と同じ様になっちゃんの弱みを握ってからなっちゃんに会いに行つたのだ。

これが楓よりも好感度が低い場合に起きるイベント、「私だけを見て」です。

このイベントが起きた場合は確定で依存になるのですが…残念ながらチャートに組み込む事は出来ませんでした。

…何故なら初期好感度は大体偏りがあるんですね。

基本的に楓ちゃんは好感度が高いですが、理沙ちゃんはそれよりも高いです。

最初から友達になっている状態なら理沙ちゃんは好感度が上がりやすく、そして下がりにくいんですね。

という事でこのイベントを発生させる場合は、好感度を楓ちゃん以下にしないといけませんね。

という事で次は「奴隷」イベントです。どうぞ。

「…あ……んぎい……あつ……ああ……」

私になつちゃんの首を絞めていると、なつちゃんから悲鳴が聞こえた。

…でも目線が私の方に来なかった。

それが嫌で首元から手を外してみると、涙目のままなつちゃんがこちらを見つめた。

それを見て私の心がゾクゾクとして…私はなつちゃんに付けた痕を優しく撫でた。

「……なん…え」

口元からよだれを流しながら、なつちゃんが私に聞いてくる。

…そう、私に“聞いてくるのだ。

その事に優越感を覚え、気分の良くなった私は優しく微笑みながら質問に答えようとした。

「なんで…こんなことするの……」

「?見てくれるでしょ?」

「こんな事しなくても、ちゃんとみ…」

嘘を吐いたなつちゃんの首をもう一度絞める。

どうして私に嘘を吐くのだろうか?楓には嘘を吐かないのに。

どうして私が触れると怖がるのだろうか?メイプルに触れられても何も感じないのに。

「もう一度聞きたいなあ?」

「……あ……あ」

「声もう出せない?大丈夫?声出せなくなっても私がちゃんと聞いてあげるからね」

「…ゆ……ゴホツ…て…」

咳込みながらも私に許しを請うなつちゃんを見て、私の心は更にゾクゾクしました。

其処にはもう理性のブレーキもない。唯なつちゃんを支配する為に自分の身体を動かす。

それは自分を嫌うゾンビの様だ。

ゾンビが人間を喰らうのと同じで、私も自分を見てくれる様になっ

ちゃんを教育^{支配}する。

其処に見え隠れしているのは、唯の自己満足だ。

「……あ、ああ……なん……え……い……え」

小さく嗚咽が漏れるなっちゃんを見て、そろそろ頃合いかと小さく息を吐いた。

…それを見て悲鳴を上げたなっちゃんを見ながら…私はなっちゃんを優しく抱きしめた。

「ねえ。痛かった?」

「…」

小さく頷く。

「怖かった?辛かった?」

「…つた」

「そうだよね?もう絶対にされたくないよね?」

「…っ!」

今度は勢いよく頷いた。

…それを見て嬉しそうに笑みを深め…そして優しく喉を鳴らしたなっちゃんの頭を…

「…じゃあ、誓って?」

「……え……あ……」

優しく撫でた。

「大丈夫。私はメイプルみたいに命令を強要したりしないし、弱みを握ったりもしないよ」

「……ほん、と?」

「うん。今までは支配^{教育}の為にやってただけで、私だってやりたくてやってた訳じゃないの」

これは本心だ。

彼女を汚す事、彼女を傷付ける事が一番早く私を見てくれるからやっただけで…別に傷つけたい訳じゃないのだ。

「…り、さ……」

「うん。なーに?」

「おねが……い……たすけて……」

「いよ」

その言葉と同時に、私の唇となっちゃんの唇が重なった。

…そのまま一気に舌を挿れて、優しく歯を撫でてから微笑めば…

「……あ……」

「…どう？きもちよかった？」

「……ん。ゲームのときより、ずっと……んっ……」

「良かった」

そりや身体にヒドラを詰め込まれている状況で気持ち良い訳が無い。

…だから別に私のテクが上手い訳でもないが…

「……あ……」

目を瞑りながら舌を受け入れているなっちゃんの顔を見ると、何処かで優越感が沸き上がってしまう。

「…ふふ、喉鳴らしてるの可愛い」

「……っ？」

「無意識かあ…可愛い」

そのまま一気に私が服を脱がせば、なっちゃんは少しだけ驚いた後に…

「…なんでも、して？」

—平野翌檜と白峯理沙の関係性が【奴隷】になりました。《主人・白峯理沙》

全てを受け入れたなっちゃんを、私が満足するまで……

はい。

これ以上は健全な番組なのでカットします。続きを見なければ本編を買しましょう。

と言った所で漸くサリーちゃんが【潜水X】と【水泳X】を習得しました。

…という事で次回は第二回イベント…の前にアプデ修正を見る所からスタートです。

(因みに最後の無言タイムは) 無いです。

という事で…では諸君、サラダバ！

速度特化と二層開放

はい、よーいスタート。

沢山ガバつても何とかなるさと前を向く走者失格のRTA、はーじまーるよー！

前回はサリーちゃんがずっと潜っているのを見つめるだけで動画が終わりましたね。

本来なら今回もそうなる予定だったのですが、大人の都合上で倍速処理カットになりました。

という事で今回はさつきと二階層の開放に行く事になりました。

…え？前回はメンテからスタートする予定だっただろ？再走しろ？

走者にガバは付き物だからね、しょうがないね。

「よーし、早速中に入ろうー！」

—元気なメイプルが私の背中を降りながら嬉しそうに喋りだす。

▽

—それを見たサリーが少しだけ苦笑すると同時に、メイプルを先頭にゆつくりと歩きだした。▽

この時点ではメイプルの最強悪食壁戦法がまだ残っているのだから、それを使って軽々攻略していきたいと思います。

因みに遠距離攻撃とかを主人公が持っていると言っていると戦闘に参加しなきやいけないので此処でロスになります。

経験値を稼げてない場合はしても良いとは思いますが…今回は走者の魂を削りながらゲームをしているのでしなくても良いでしょう。

この走者、RTA中一切眠らなかつたってマジ？

「…調子悪そうだけど、大丈夫？」

—メイプルが少しだけ心配そうな表情でこちらを見つめてきた。

▽

—大丈夫だよと小さく微笑み返すと、少しだけ困った様な表情でこちらを見つめた。▽

「これからボス戦だし、体調悪かったら早めに言ってね」

タイミングよく色々言われましたが、これはゲーム内で何度も徹夜した場合に現れるイベントですね。

特に放置しても何も影響ない筈なので、此処は無視していきましょうか。

—大扉を開けると、其処には高い天井とそれに届かんばかりの大樹が聳え立つ部屋があった。▽

—私達が部屋に入ると同時に扉が閉まる音が聞こえ、大樹が巨大な鹿へ姿を変えていく。▽

—遠目から見れば大きな鹿だが、大樹から変わった影響か角からは青々とした木葉が茂り、瑞々しい林檎が実っている。▽

「来るよー」

—その言葉と同時に、巨大な鹿が私達を睨み付け…鹿の足元に緑の魔法陣が現れ輝きだす。▽

「うんー」

—戦闘開始だ。▽

まず初めに角を狙って攻撃をしましょう。

始めは蔓を使った攻撃で確定なので、もし走る方がいたらこの攻撃はちゃんと覚えましょう。

先ず初めにギリギリ引き付け、そのまま襲い掛かる蔓の上に乗ってタイミングよくジャンプをしましょう。

はい321：おkですね。

ジャンプした御蔭で自分の目の前に角が現れたので三回斬りつけましょう。

本来なら魔法陣がある為身体等に攻撃しても意味がありませんが、林檎を攻撃するという都合上角には攻撃が通ります。

「…」

三回攻撃した後に角に剣を引つ掛け、角に足を掛け片足だけでスキル【跳躍X】を使用します。

これはバグ利用なので当然次回修正されますが今回は大丈夫です。

そのまま距離を稼ぎつつ剣を角に投げ刺して林檎を落としておきます。

「【ウインドカッター】！メイプル！」

「うん！【毒竜】！」

—メイプルの短刀から紫色の竜が鹿に向かって襲い掛かってくる。

▽

—紫色の竜が毒をまき散らしながら鹿を噛み付き、確実に体力を減らしていくが…▽

此処ですね。

丁度跳躍で離れた距離が縮まったこのタイミングで剣をもう一度取り、”STRをボスのステータスより1低くして”三回攻撃をします。

因みにこの三回攻撃は一秒の間にやらなくてはいけません。

—緑色の魔法陣が点滅し、硝子が割れた様な音と共に壊れる。▽

—そして巨体の鹿が倒れるのと同時に…光になって爆散していった。▽

「…：うわあ。これメイプルが居なかったらかなり時間掛かったね」

「そうかな？私は翌檜ちゃんの方が凄かったと思うけど…」

工事完了です…。

本来なら緑色の魔法陣が消えて鹿の体力が回復するんですが…今回はそれをスキップしました。

因みにこれから走る兄貴達の為に解説しておきます。画面右にご注目下さい。

—緑色の魔法陣。

—体力が2割になった時に発動する。

—体力を1割回復し、現在掛かっているバッドステータスを治療する。

こちらは鹿の下にあった魔法陣の説明です。

まず発動するタイミングですが、二割になった”時”に発動します。

つまりスリップダメージで地道に削ると回復していくんですね。その為メイプルちゃんに任せると最終的にメイプルちゃんがスタン

されて結果的にサリーちゃんが頑張る事になります。

それを防ぐ方法として使ったのが今回のタイミングよく一秒で三連撃を与えるという方法になります。

それでは二人が喜んでいるのを右側に移動して……中央の動画をご覧ください。

これはさつきと同じようにメイプルちゃんが【毒竜^{ヒドラ}】を使った状態ですね。

……はいストップ。ボスの体力バーをご覧ください。

HP [――]

体力が二割五分程度残っているこの部分ですね。

もし此処で何もしないと残念ながらメイプルちゃんの毒によって二割に到達します。

では二秒程進めてみて……此処ですね。

HP [――]

二割に見える？（これ以上は書けないんだから）当たり前だよなあ？

という事で二割と一虚空だけ残っている状態です。後1Fも立たない内に緑の魔法陣が起動して回復するでしょう。

そして走者の翌檜ちゃんですが、既に鹿の角に剣を合わせています。

そのまま決り取る様な三連撃……これが理想の動きですね。

HP [――]

という事で二割を飛ばして一割九分程度に減らしたらなんと、緑色の魔法陣は発動しませんでした！

……はい。

MMO廃人兄貴なら分かったと思いますが、フェーズ移行を使った技飛ばしですね。

これによって緑色の魔法陣を使った回復よりも先に全体スタンを行おうとするので、その間に削り切れば大丈夫です。

今回は【毒竜^{ヒドラ}】の効果が残っていたのと翌檜ちゃんが都合よくクリティカルを出してくれたので何とかかりました。

やっぱ…【毒竜^{ヒドラ}】の…火力を…最高やな！

と言った所で今回は此処まで、次回は第二回イベント準備をしたい
と思います。

では諸君、サラダバ！

「あうう…」

「うーん…私もまさかイベントの二週間前にメンテが来るとは思わな
かった。しかも…」

「今回のメンテナンスは上位陣対策。私含めて結構な弱体化だね」

私と楓が楓の家で、理沙が通話で話しているのは次のメンテの内容
だった。

私を抱きかかえている楓が悔しそうに見つめる先には、悪食の回数
制限の追加と……

「防御貫通攻撃は私達に関係ないけど、楓は大変そう」

「そうなんだよー！痛いのは嫌なのに…！」

「一応痛みの軽減はあるんだけどね。貫通攻撃はよくあるスキルだ
し、今までが少な過ぎたかな」

理沙がそういうのと同時に、楓が申し訳なさそうに画面の理沙に手
を合わせる。

「あー…ごめんね！無敵じゃなくなっちゃった…これじゃあ無敵パー
ティーになれないし…せっかく回避盾になってもらったのに」

「それは仕方ないよ。それに、ダメージは受ける様になったけど…絶
対ノーダメージじゃなくなっただけだし…ダメージエフェクトが
出る分削っても削っても死なない！ってなって無敵感が強調される
し。不敵に笑っていれば格好良いままだよ！」

それを聞いた楓がこつちを見つめ、更に申し訳なさそうな表情を浮
かべた。

その事に少しだけ疑問を覚えつつも、私は苦笑しながら優しく楓の
頭を撫でる。

「楓なら色々スキルを発見すると思うから大丈夫。それに、防御貫通

攻撃”って事は “ダメージ減少スキル” とかが見つければ更に無敵感が増す」

「……そうすれば、翌檜ちゃんを更に守れるかな？」

「…？私はずっと楓に守られているから大丈夫だよ」

そう言つて小さく口を緩ませれば、楓が嬉しそうに微笑んでから

……何かを想像したのか黒い笑みを浮かべた。

私はそれにドン引きしつつも、ゆっくりと理沙の方を見て微笑む。

「理沙も一緒に考えてくれるよね」

「……はあ。はいはい、一緒に考えてあげますよ」

「ありがとう」

素直にお礼を言うのと同時に、理沙の頬が少しだけ朱くなって目を逸らされる。

それを見て楓が少しだけ頬を膨らませると同時に…

「でもそうになるとHPも上げないといけないか。貫通で削られちゃうとまずいし……痛いのは平気？」

「まあ…どうしても無理、ではないかな？現実よりは全然痛くないし…しかも、痛みが軽減されたみたいだし」

「PSを磨いて出来るだけ防ぐのと……回復系のスキルと装備、MPとHP系統もいるかな？」

「後は悪食と使い分ける盾が欲しいね」

その言葉を聞いて、楓と理沙が小さく首を傾げた。

「新しい盾ならこれから作って貰うよ？」

「でもその盾ってオーダーメイドだよな？それだと耐久度を管理しないといけないよね」

「あ……確かに初心者の方の楓にそれをさせるのは難しいか。でもユニーク装備の大楯なんて……」

その言葉を聞いて、私は少しだけ考えた。

…一つだけある。けれどそれを一人でやらせるのはかなり成功確率が低かった筈だ。

失敗すればスキルを習得する時間が間に合わず、【銀翼】に勝てない。

けれど今回のこれを手に入れば楓が更に強化される筈だ。

「…何か考えがあるの？」

「ある…けど、イベントの強化を考えると0か100」

「時間が掛かって失敗すると…って感じか。情報はあるの？」

…その言葉に逡巡しながらも…今回は良いかと小さく微笑んだ。
どうせ現実だから運営には通じないだろうし、言い訳も何とかなる筈だ。

「…私が持つてる情報は一つ、始まりの街の教会と言う所で受けられるクエスト」

「えつと待ってね…これ？」

その言葉と同時に、理沙が携帯の画面を見せる。

それを見て私は小さく頷くのを見て…理沙は小さく首を傾げた。

「でもこれでユニーク装備が出るなんて書いてないけど…」

「…私の持っている【円卓の王】ってスキルがあるんだけど、それを持つた人とペアで組むと発生するユニーククエストなんだ」

「そうなんだ?!…ってあれ？どうしてそんなクエスト知ってるの？」

「このスキルを手に入れた時に各地に光の柱が出て、その時に教会に行ったら発見したクエストだった」

その言葉を聞いて少しだけ理沙がこちらを見つめ…そして小さく頷いた。

…どうやら一応誤魔化せたらしい。

「そっかーじゃあこれから一回やってみる？」

「…止めた方が良くと思う。多分だけどユニーク装備が手に入るって事はかなり難易度高いだろうし、時間もかかる…そうだよね？
なっちゃん？」

「…うん、多分そうだと思う」

「そっかー…でも明日学校ないし…」

そう言いながら私を抱きしめてむすつとしている楓を見て…私と理沙が思わず苦笑した。

…こうなった楓を宥めるのは難しいし、それだったら一回挑戦して

貰った方が良いだろう。

「…じゃあ一回だけやってみる？情報は必要だろうし」

「良いの!?!じゃあ早速ログインしよ!」

「…分かった。私も一緒に行くから少し待っててね!」

その言葉と同時に通話が切られたのを見て、私は苦笑した。

それを見た楓が嬉しそうに私の手を握るのを見て…私は小さく頷いた。

「それじゃあゲームでね!」

「あ、待って!」

そう言いながら急いでゲームの準備をする楓を見て、私は思わず声を掛ける。

それを見た楓が小さく首を傾げるのを見て…私は小さく口を開いたり閉じたりしてから…

「…頑張ろうね」

「うん!」

嬉しそうに頷いた楓を見て、私は小さく微笑んだ。

…今回は楓は何もしなくても良い、唯私が頑張れば良いんだ。練習はした。

勝てるかどうかは分からないし、認められるかどうかも分からない。でも…

でも…

「…頑張らなきゃ」

頑張ればその分だけ楓が強くなる。

第六階層に行けば更に強化されるし…そんな事を考えながらゆっくりとゲームの準備をしようとして…

「…」

身体の震えを無理矢理抑えながら、私は小さく息を吐いた。

速度特化と下準備

はい、よーいスタート。

今RTAにおけるリセ関門を乗り越えるRTA、はーじまーるよー！

前は確かメイプルちゃんを説得して早期強化をしようとした所からでしたね。

「着いたー！教会って此処で良いんだよ……」

「ああ円卓の王様とその騎士殿！どうか我々をお助け下さいませんか！」

—私達が教会に入ると同時に、一人の男性が私達に話しかけてきた。▽

はい、大楯と【円卓の王】スキル持ちが居る状態で発生するエクストラクエスト【世界最高の騎士への挑戦】です。

此方は第四階層で絶対にクリアさせる気無いだらうという鬼と同類のクエストですね。

…つまり簡単に言うと言語からのおふぎけクエストです。

「楽しみだねー！」

—その言葉に小さく頷きながら、私は武器の確認をする。▽

翌檜ちゃんが武器の点検を、メイプルちゃんがクエストの説明をしている間に今回の説明をしたいと思います。

先ず初めに、今回のクエストで倒すのは『頹廢した円卓の騎士』『ガラハッド』です。

…え？普通のガラハッドは穢れなき騎士だらうって？……うるせえ！（逆ギレ）

このゲームでのアーサーは【円卓の王】と言うスキルを持ちながら【孤独の剣】と言う相反するスキルを持っています。

簡単に言うと言語の騎士に裏切られた悲しい王様です。

一応【孤独の剣】は仲間を集めると別のスキルに変わったりするんですが、今回のRTAでなる可能性は殆ど無いでしょう。（フラグ）

だってそのイベント沢山時間を掛けた割に得られるのがまあまあ

のプラス要素とスチルですからね。

その為にRTAの自己ベスト大幅更新を捨てる走者が居たら一生の恥だよ、恥。

「…へえ…可哀想な王様だね」

自業自得だよ。

↓そうだね。

此処は便乗しておきます。そうだよ（便乗）

因みにこのアーサー王のお話は史実のアーサー伝説とはまた違ったお話ですので、もし興味がある方は本編を購入したらどうでしょうか？（ステマ）

と言う訳でそろそろ翌檜ちゃんの速度で全力で向かう事にしましょうか。

次のメンテナンスまで最大速度で走るのは此処までですので、マツハ3の見納めです。

—確か現れるのは此処だった筈だ。▽

—…少し待ってみる？▽

待つ。

待たない。

此処は選択肢で待つを選択…と見せかけてこの選択肢のままじつと五秒程待ちます。

…三、二、一…今ですね。

「…」

—突然虚空から私に向かって剣が飛んできた。▽

この剣は即死攻撃なので全力で避けます。

他の攻撃も全て即死攻撃ですがこれだけは本物の即死攻撃です。

これを避けてきて戦闘開始…と行きたいんですが、残念ながらそうはいきません。

今回のガラハッドは四つのギミックがあつてそれを解除しないとダメージすら入りません。

しかもギミックを解除出来るのは第一形態のみでして、もし解除する前に自分が死んでしまうとギミック搭載のまま大楯の下に移動し

て詰みます。

なので最初にやる事は全力でギミックを解除する事です。

「……」

始めに鎧に穴を空ける為に剣を振るいます。

今までは【孤独の剣Ⅲ】のパッシブ効果を速度に殆ど割り振っていましたが、今回は全て筋力値に振っています。

全部振った所で相手の筋力値が超えないからです。

という事で心臓のあたりに何度も斬りつけ、綺麗に丸く開けられたら第一ギミックは成功です。

…これをノーヒントでやれとか、此処の運営頭おかしい……。

はいまず鎧に埋め込まれた聖杯を取り出した事によって目の前のガラハッドが弱体化します。

それに合わせて自分の筋力値も下げてください。今回は相手の筋力値より2低い程度です。

因みにこのままで勝てるか？と言えば私は勝てます。

ですが残念ながらメイプルちゃんか勝てないですね。

現在即死悪食が無効なのでもう一つか二つギミックを解除しないと絶対に勝てません。

…という事で相手がデレてくれる事をお祈りしながら待ちましようか。

……まだかな？この攻撃かな？…はい残念別のギミックでした。

今回のギミックは修正後だと防御貫通無効化ギミック、今の状態だと攻撃力低下ギミックですね。

まあ…まだ当たりの部類です。

適当にガラハッドを殴りながら攻撃を往なしたりしてギミックを解除するのが私の戦法ですが、ガラハッドを搦うならもう少し面倒な手順を踏まなければいけません。

しかし頹廢ガラハッド君を救うアイテムは現在のバージョン階層にはありませんので今回涙を呑んで殺しましょう。

…はい、最後のギミックで漸く出てきましたね。

此方は即死無効とだけあってかなり厳しい条件で解除です。簡単

に言うところから一分間で分身のガラハツドを殺さなければいけません。

と言ってもHP以外のステータスは本体から引き継いでいますので何とかなりません。なりました。

修正前に此処来たのは正解でしたね。修正後だったら即死無効が剥がせずクリア不可になってたでしょう。

—漆黒の騎士が跪き、そのまま光へと変わっていく。▽

—私の勝ちだ。▽

はい。

あっさりと終わりましたが走者はかなり疲れました。

…それではメイプルちゃんの下に歩きながら戻りましょうかね。

次回は第二回イベントからお会いしましょう。

では諸君、サラダバ！

私がメイプルの居場所を思い出しながら歩くのと同時に、小さくガサリと音が聞こえた。

…PKだろうか？

確か此処でPKは出なかった筈だ。ペインと戦う日もまだ早いし

…ランダムイベントだろうか？

「…つと、もう見つかったる？」

「サリー？」

「そうだよなっちゃん。これからメイプルが居る場所に戻るんでしよう？」

「…」応そうだよ？」

私が返事をするのを聞いて、サリーは少しだけ私に疑いの目を向けてきた。

それを見て私は思わず視線を逸らそうとするが…

「どうしたの？何か後ろめたい事でもあるの？」

その言葉を聞いて私は思わずサリーの方を見てしまった。

…それと同時に、サリーが勝ちを確信した様な笑みでこちらを見つ

めていて…

「まるで、私がこれから何をするか分かつてる様な表情だよね」

その言葉を聞いて、私の頭が真っ白になった。

それと同時にサリーは一瞬で私の方に武器を構え…につこりと微笑む。

…違う、まだ終わってない。

私は武器を構えたままゆっくりと周囲を見渡す。

「…どうしたの？伏兵でも確認して…」

サリーが喋った瞬間、真後ろでガラハッドが動き出す。

…それを見て私はステータスを全て速度に特化させ、全力でサリーの身体を自分の身体で吹き飛ばした。

サリーの体力が全損しなかった事に少しだけ安堵の息を吐きながら、私はガラハッドの方を見ようとして…

「っ!？」

「…え、…あ」

私の視界が二分割する。

それと同時に私の視界が少しだけ低くなって…ああちがう、斬られたから上半身が落ちてるだけだ。

…レベルの所為で、空蟬食いしぼりが発動してるからすぐく痛いんだよね。

「……なつちや……そんな、ちが…」

「…ごめんね。お化け恐いのにな、こんな姿でしゃべ…」

謝ると同時に、ガラハッドが盾を振るおうとする。

それを見てサリーが急いで駆け出そうとするが、速度が足りない。

…それを見て私は少しだけ唾を飲んだ後に…

「…やっぱり、いたいね」

「…あ…」

それと同時に鈍い音が鳴り、私の身体が一瞬で光となってばらける。

…これは、ガバだろうな。

本来なら悪食が使えない時にする筈だった行為だったのだが、今回は無制限に悪食が使えるのだ。

体力を一残しで終わらせる理由は一切なかった筈だ。

「…」

ガラハツドが消えてメイプルの前に転移して、それを見たメイプルが盾を使つて一発で殴れば終了する。

…完璧な攻略だと思つていたのに、結局またミスをしてしまった。

「違う…そうじゃなくて…あ…あああああ！」

サリーが一人で泣き崩れているのを見ながら、私は街へと戻つていく。

…それと同時にクエスト完了と言う文字が見え…私は小さく安堵の息を吐いてからログアウトした。

速度特化と友達強化

はい、よーいスタート。

前回は自分の凡ミスでノーダメージクリアが失敗した所からスタートです。

その代わりに今までより最短でクエストクリアしたので没問題です。

さてそれでは残りの二人をさっさと強化したいので三人でやりたいのですが…

「……」

「……」

「……」

なんか空気重くね？

私が死んだ事によって時たま空気が重くなることはあるのですが、こんな現象は初めてです。

何？メイプルちゃんですら空気読んで黙ってるってどういう状況？

余りにも空気が重くなって画面の中の私が何か話題を出しますがお互い一言だけで終わるんですけど。

「…その、えっと…いい天気だね」

「そうね」

「う、うん…」

「……えっと、お出掛け日和だね。二人は何処に行きたい？」

「…空の上」

「わ、私は川とかかなあ…あはは…」

やばい。(確信)

因みに理由は既に説明されており、これはキャラクター内部の不審値が一定以上に溜まっている時に目の前で庇って死ぬと起きるイベントです。

あの時のサリーちゃんは何か違和感を感じていて不審値が溜まっていた様ですね。危なかった。

…一応イベントの進行具合にもよりますが関係性【決別】とかだとリセットになるので本当に危険なんですよこのイベント。

そして今回の場合、相手が凄く悲しそうな表情でこちらを見るだけなので普通に問題無しです。

命令に従ってくれるというメリットと攻撃を食らいそうになった時庇う可能性があるというだけなので、こちらとしては特にデメリットが其処までないですよ。

「…その、今日は何をする？折角メイプルも強化したんだから、サリーも強化したいよね？」

「…そうね」

「じゃ、じゃあ今日はサリーを強くする日にしよー！」

「…そうね」

「…お、おー！」

因みに画面の中の私はコミュ障なのでどうしようもありません。

もしこれが陽キャだったら色々やって元気なサリーが復活するかもしれませんが、私は陰キャなのでどうしようもありません。

「…ね、ねえ。サリーどうしたのかな…？」

「…分らない」

「っ！」

因みに画面の中の私は今まで喋った情報を一切知らないので普通に分かっていません。鈍感主人公かな？

と言うか知ってたらあんな行動取る前にさっさと誤解を解いてます。当たり前だよなあ？

そして画面の中の私はサリーちゃんが悲痛な表情を浮かべている事にすら気付いていません。目の代わりに綺麗なガラス玉でもつけていらっしやる？

「…でも、有用なスキルを集める為には別れた方が良いと思う」

「へ？何で？」

「メイプルと私達で集めるスキルが違うから。一応パツシブ…えつと、例えばHP増強系とか…は一緒に集めた方が良いけど、逆に速度アップとかはメイプルは使わないでしょ？」

「あ、そっか」

「だから最初に三人で軽くHPとMPスキルを取って、その後に別れて行動…どうかな？」

「…それだったら私は…」

メイプルと一緒にについていく。

サリーと一緒にについていく。

↓一人で探索しようかな。

はい、此処で選択肢ですね。

今回は一番下を選択しています。理由は単純に一人だけレベルが違うからです。

サリー

Lv18

HP 32 / 32

MP 25 / 25 ^+35<

[STR 25 ^+20<]

[VIT 0]

[AGI 75 ^+68<]

[DEX 25 ^+20<]

[INT 25 ^+20<]

此方は現在のサリーちゃんの間易ステータスですね。

最近始めた人からすればかなり上出来な方、寧ろ学校とかある分まだ良い方ですね。

asunaro

Lv46

HP 32 / 32 ^+30<

MP 12 / 12 ^+50<

[STR 0 ^+200<]

[VIT 0]

[AGI 235 ^+301<]

[DEX 0]

[INT 0]

装備

頭 【宣託の王冠】

— 【破壊成長】

— 【円卓の王皿】

体 【騎士の鎧】

右手 【エクスカリバー】

— 【破壊成長】

— 【孤独の剣Ⅲ】

左手 【空欄】

足 【騎士の鎧】

靴 【騎士の鎧】

装飾品 【少女のお守り】

— 【少女の花飾り】

— 【少女の押し花】

スキル

【韋駄天走】 【連撃の心得Ⅴ】 【音速の連撃】 【大物喰らい】 【侵略者】

【破壊王】 【多速分身】 【片手剣の心得Ⅴ】 【片手盾の心得Ⅴ】 【体捌き】

【攻撃逸らし】 【自分喰らい】 【発狂無効】 【恐怖無効】 【HP強化小】 【M

P強化小】 【跳躍X】

これが主人公である翌檜ちゃんのステータスです。

今まで眠らずにずっと狩りをし続けた結果、第一階層のペインよりは遅くともかなり強いステータス（当社比）になりました。

勿論これくらいになる為には一睡もせずに適正より+2の所で狩りをし続ける必要があります。

：此処で勘が良いかもしれない兄貴達は、アーサーを31時間掛けて倒さず適正+2を狩り続けていれば良かったのでは？と思った筈です。

確かに前やっていたチャートはアーサーを倒さずその時間を掛けて魔物を倒していたんですが……残念ながら途中で詰んでしまうんですよね。

何故かと言うと最終的にレベルの高いプレイヤーをPKして経験

値を得るぐらいしか無くなるからです。

ペイン君が第一イベントでレベル60ぐらいあった理由がそれですね。あいつ何時も強敵をに挑んでPKとか全員返り討ちにする化物ですからね。

今はスキルの影響で+が出ていますが最終的になくなります。運営のアップデートは最高だな！

因みに装飾品はクエストで手に入った装飾品ですが別に+要素はありません。

女の子から笑顔で渡された物を使わない奴が居ないよなあ？

「…」

—三人でスキルを取った後、皆で別れて探索する事になった。▽

—何処に行こうかな？▽

さて此処から一週間は自由行動です。

やる事無いなど思ってたこの一週間墮落した様に過ごすとか、可愛い女の子とデートするとかサリーのお腹を突き始めるとかすると一週間と言う時間はあつというに過ぎてしまいます。

今必要なスキルはチャートにちゃんど書いているのでそんな心配はいりませんけどね。

そんなこんなで次回は第二回イベントをやるうって所で今回は終わりたいと思います。

では諸君、サラダバ！

やばい。チャートなくした。

絶望的な状況になっているのを見ながら私は思わずため息を吐いた。

…今の時間だとサリーが超加速でメイプルがダンゴムシだろうか？今はサリーの好感度を上げる必要はなかった（気がする）し、それなら適当に街をぶらついてからスキルを探せばよいだろう。

そして本来寝る時間でチャートを探せば大丈夫…な、筈。

そんな事を考えながら敵を倒していると…目の前に一人の少女がいた。どうやら先客が居たらしい。

「…っ…っく!?」

この子誰だろう?

なんかこう…第一回イベントで出会った記憶はあるんだけど…
えっと…えっと…。

まあいいや。きつと思いきや出せないって事は其処まで重要なキャラ
じゃないだろう。

だって第一回イベントの時はちゃんとネームド思い出せたし。う
ん。

「ま、待ってー!」

「…?」

そんな事を考えながら私が次の場所に移動しようとする…彼女
から静止の声が掛かり私は思わず首を傾げた。

…何か用があるのだろうか?でもちよつとモブに構う時間は無い
し…うーん?

「…その…あの時の女の子、だよね?」

「あの時…えつとごめんなさい。覚えてない…です?」

「そ、そっか…そう、だよね…うん」

少しだけ傷付いた様な表情を浮かべて…でも少しだけ諦めた様な
表情を浮かべていた彼女は…私の方に一歩近づき始める。

「…強いよね。君」

「それがどうしたの?」

「あのペインに一方的に勝って、それが偶然でもなくて、私の知らない
スキルを沢山持つて…すごいよね」

「そんな事は無いと思うよ?」

「あるよ。だからさ…」

大量の魔法が私の目の前に現れる。

それと同時にアクティブモンスター達がゆっくりとこちらに近づ
いてくるような音が聞こえた。

彼女は気付いているのだろうか?それとも、気付かずに…?

「…死んでよ。私の為に」

その言葉と同時に、私に向かって大量の魔法が襲い掛かる。

火球が、水球が、風の矢が、雷が一斉に襲い掛かるのを見ながら：私は自分の持ち前の速度を使ってそれらを切り抜け始める。

火球と水球は互いをぶつけて消滅させ、風の矢は周囲の敵に当たるように。雷は自分で斬れば良い。

【多重障壁】

私の行動を阻害する様に、大量の障壁が私の周囲にばら撒かれる。それを見て私は障壁を蹴って上に移動し、迫ってきていた雷を空中で斬り落とした。

また大量に追加された魔法を見ながら、私は落ちる様に回避をし：

【多重転移】

「…？っ!？」

私が転移され、全く別の場所に移動した私は反射速度だけで回避をする。

考えながら魔法を斬り落としていたのがバレていたらしい。自分の位置や相手の位置、更には魔法の位置すらも分からない状態で戦うのは結構きつい。

一旦態勢を整える為に上に：

「それはさっきも見たし、やらせないよ【多重障壁】」

上がるうとした瞬間、私の身体に大量の魔法が降り注いだ。

けれどそれは周囲の障壁によって弾かれ、私は思わず首を傾げてしまった。

…それと同時に上の障壁だけ耐久度が無くなったのか、障壁が弾かれ…私の身体が固定されたまま頭上に大量の魔法が降り注ぎ…

「…アハッ！勝った！私は、あの子に勝てたんだ！あの時の私とは違う！これならペインと一緒に居ても…」

「……【空蟬】」

私の一言と同時に、大量の魔法が降り注いだ場所から一步後ろに移動していた。

…そしてそのまま一気にあの子の方を見ると、私の姿を見てびっくりしていた。

「…えっ？うそ……」

「……満足した？」

私の一言と同時に目の前の少女が両手で杖を握りしめる。

「っ！【多重光砲】！【多重炎弾】！【多重水弾】！【多重石弾】！【多重風雷槍】！」

大量の魔法を見ながら、私は何処かで見ただ様に首を傾げる。

…それと同時に全ての魔法を躲しながら、一気に彼女の方に一歩ずつ近づき始める。

「な、なんで！」

「……うーん？」

残り五歩、思い出す為にゆっくりと歩きながら私は周囲の方を警戒する。

…というかあれだけ凄い魔法使ってたし、多分ランカーの人達…あれ？そういうえば【多重詠唱】って一人しかいなかった気が…

「…私はっ！貴女に勝つ為に沢山努力をした！色んな人から情報を手に入れて！他の人を騙したりもして！」

「…えっと、【多重詠唱】者でランカー…覚えてる筈だけど…あれ？」
残り四歩。一歩ずつ歩きながら彼女の事を必死に思い出す。

…えっとえっと、えっと…そう、フレデリ…カ？

そんな名前だった筈だ。

「今の私と戦う時は、あのペインでも私を見てくれる程度には実力も付いたのに！」

「…良かった思い出せて。安心安心」

残り三歩。所でこれ何のイベントだっけ？

進めると即リセット案件のイベントは覚えているけど、こういったミニイベントは覚えていない。

…まあ、つまり解決しても良いイベントという事だ。

「何で！見てくれないの?!あの笑顔を苦痛に歪ませられたら、私ももっと強くなれる！」

「……？見て欲しいの？」

聞き取った言葉を聞いて、私はゆっくりと少女の方を見つめる。

…これで良いのだろうか？

そして何時しか止んでいた魔法に首を傾げながら…私はゆつくりと彼女の前まで来た。

「…あ」

「もう良い？」

小さく首を傾げるのと同時に、自分の視界だけにダイスが映り始めた。

それを見て私は思わず口を引き攣らせてしまう。…このダイスが出た時は大体、いや殆ど…多分9割リセットする。

「…」

—フレデリカのトラウマ【笑顔】が治療されました。▽

余りの運の良さに笑みが浮かんだ。

…良かった。今回はトラウマ治療だけで済んだ。これが勝手に依存とか入ると大変な事になる。

「…うう、うん。もう大丈夫。怖くない…から」

「そっか、良かった」

本当に依存が無くて良かった。

もし依存してたらこのゲーム人生ハードモードだし。諦めてリセットしそうになるしね。

…私の顔が笑顔になるのを感じながら、ゆつくりと呟く。

「…本当に、良かった」

速度特化と第二回イベント。

はい、よーいスタート。

フレデリカちゃんのミニイベントを消化だけして残りを無益に過ごしたRTA、はーじまーるよー！

今回は第二回イベントをやっていると思うのですが…

「…なんであんたが居るの」

「良いじゃん良いじゃん。損はさせないよ?」

「貴女は何時もペインの傍に居たんでしょ?今回もペインの傍に居た方が良いんじゃない?」

「ペインはコイン持つてるからねー。何時もいるメンバーの中で持っていないの私だけだから、今回は離れてこっちで稼ごうかなってね」

「置いていっても良いんですよ?」

「おやあ?確かに君なら置いてかれるかもしれないけど、もう一人の子ならどうかな?私ならすぐに追いつけちゃうよー?」

「……………」

ーフレデリカとサリーが話している。▽

ー…少しだけ仲が悪そうだ。▽

どうしてこうなった?

いや前回フレデリカちゃんに出会ったので組めた可能性あるんですけど…可笑しいよなあ?

本来なら好感度が低い筈なので一緒に組む可能性は低く、そもそも誘わないと来なかつた筈です。

勿論チャート通り(チャートを無くした日は除く)ちゃんど動いた走者にフレデリカちゃんを誘う暇はありませんでした。

という事はフレデリカちゃんの好感度が上がったか、ステータス異常【依存】になったかの二択なんですが…ゲーム内で閲覧できるログには何処にも書いてなかったんですね。

「という訳でパーティに入れてよ。良いでしょ?ね?メイプルちゃん?」

「は、はい。私はフレデリカさんに最初教えて貰えたし…:サリーは

なんで嫌なの？」

「…勘」

「うーん…サリーの勘も当てになるし…翌檜ちゃん…どうしよう？」

↓参加させる。

参加させない。

馬鹿じゃねえの？（嘲笑）

まあパーティーメンバー増えた所でRTAのデメリットは無いですからね。少々キャラクター内で修羅場が発生して仲がこじれるだけです。

メイプルちゃん可愛いからね。仕方ないね。

「……まあ。なっちゃんと言うなら……」

「やた。ありがとうね？ “なっちゃん”？」

「ん。宜しく」

—フレデリカが私の名前を呼んだ瞬間、サリーの目付きが鋭くなった。▽

—それを見たメイプルが怖がるようにこちらを見つめるが…私も分からないので小さく首を傾げるだけだ。▽

—…七日間、大丈夫なのだろうか？▽

システムの主人公が不安がつているのを見るに、今回のフレサリの好感度はどうやらどん底らしいですね。

勿論そんな事を考えていてもしょうがないので早速イベントに参加しましょうか。

運営からのアナウンスを聞きながしながら、三人の仲を取り持つておきましょう。

【銀翼】でスチルを獲得する為には最低限の好感度は必要ですからね。

「ん……着いた？」

「着いたみたいだね」

「そうだね。此処は…草原かな？」

—三人の声を聴いて、私はゆっくりと周囲に視線を向ける。▽

—何処を見ても草だらけだ。他のパーティーも居ないし、まあまあ良い立地だろう。▽

メイプルちゃん達と一緒に居る場合、初期地点は草原固定です。

：先ず初めにやる事は巧妙に隠されている洞窟を探す所からスタートですね。

「…ゴブリンが居るねえ?」

「えっと、【悪じ…】」

「フレデリカさんの力を見たいし、此処はフレデリカさんに任せよう」

—サリーの不敵な笑みを見て、フレデリカが嬉しそうな表情を浮かべる。▽

「良いよ?これからパーティーを組むんだから多少の能力は知って貰わないとね?」

—その言葉と同時に、フレデリカが私の方を見てウイंकをしてきた。▽

という訳で今回はフレデリカちゃんが適当にゴブリンを散らすらしいですね。

此処は割と沢山の種類のイベントがあります。

例えばサリーちゃんが良い所を見せようとして草を踏みつけてすつころんだり、メイプルちゃんが盾を何処まで扱えるか見せる為に突っ込んだり、主人公が戦ったり逃げたりとかですね。

—フレデリカが魔法を一つ唱えるのと同時に、大量の火球が周囲を飲み込んだ。▽

—私が戦ってた時よりも数が多い事に少しだけ疑問が浮かぶが：目の前のフレデリカが楽しそうに笑っているのを見て、唯成長しただけかと納得した。▽

「こんな感じ。お眼鏡には適ってた?」

「…まあ。そうだね」

「おお。実力を認めてくれるなんて、流星はなっちゃんの友達だね。ねえー? なっちゃん…」

「…私と一緒に呼び方にしないで。もし次したらコイン奪うから」

因みにこの時の走者は可愛いなあと思っと思っています。走者は鈍感だからね。仕方がないね。

そんなんだから依存と奴隷関係が増えるんじゃないんですか? (嘲笑)

笑)

「はいはい。それじゃあなんて呼んで欲しい?」

「別に何でも」

「じゃあ…うーん。……マイハニーとか?」

「…恥ずかしくないの?」

「……じよ、冗談だから…」

—私が突っ込みを入れるのと同時に、フレデリカの頬が赤くなる。

▽

—やっぱり恥ずかしかったらしい。▽

—そしてそれを見たサリーの目つきが更に悪くなる。▽

—………。▽

—少しだけ仲が悪くなったような気がした。▽

おっとランダムイベントで仲が悪くなってしまったようですね。

確かこれは嫉妬イベント…だった気がしますね。あんまり覚えていませんし、実際好感度が下がるのはNPC同士なので特に気にしていませんでした。

因みにもしこのイベントをプレイヤーの手で起こしたい場合はメイプルちゃんに特攻を仕掛けて好き好き言ったら勝手におきます。勿論サリーとも仲悪くなれますよ。

という事であっさりゴブリン退治とダンジョンのボス退治が終わってメイプルちゃん達は森へ肝試しに向かうそうです。

此処で一度別れてコインを集める旅に出掛けましょう。

一日目に残っているダンジョンだと速度特化(もしくは超加速持ち)でしか取れないダンジョンが約3つ。内二つは放置するとドレツドに取られるので今日中に取りに行きましょう。

「…分かった。でも気を付けてね」

「うん。困ったら私達を呼んで!すぐに駆け付けるから!」

—二人と別れた。

という事で早速取りに行きましょうか。

…え?どうしてフレデリカをパーティーから外さないんだって?

ガバだよ(諦め)

まああそこは戦闘も無い唯の速度特化の追いかけっこなのでパ
パッとやっつて、終わり！です。

勿論皆さんがやっているのを唯見ているだけじゃ暇でしょうし
……みーなーさーまーのーたーめーにい…

フレデリカちゃんの可愛い可愛いシーンを公開したいと思います。
実は私フレデリカちゃん好きなんですよ。可愛いし可愛いし可愛
いですからね。

ですが今回は翌檜スチル獲得と言う事で涙を吞んでフレデリカ
ちゃんとお別れした筈なんですけどねー不思議ですね。

まあ【多重詠唱】持ちを作るのはかなり面倒なので、フレデリカちゃ
んで済ませられるならそれで良さそうです。

と言う事で私が好きな一っ目のシーン。【私を守ってくれるの？】
です。

「…あ」

—不味い。殺される！▽

—失敗した。ちよつとしくつたってレベルじゃない！どうしよう
このままだと…▽

—一人で行かず、誰かが来るまで待つてればよかった！目先の欲に
眩んだらこの始末だし！▽

—……。▽

「あ、やばい…死……」

—死を受け入れようとして、ペイン達に言い訳を考えようとした瞬
間…私を襲っていた魔物が跡形もなく消え去った。▽

—…どうしてとか、誰が？とか思う前に杖を握った私は、周囲を警
戒する。▽

—でも、誰も居なかった。遠くからの狙撃だろうか？▽

—じゃあ何で……

「私を守ってくれるの？」

—私を守った人は誰だろう？何処で何をしているのだろうか？▽

—会ってみたい。感謝したい。思考を覗いてみたい。▽

「……取り合えず、色んな人に話を聞いてみようかな？」

——遠くに映った布の切れ端を見つめながら、私は微笑みつつ杖を仕舞った。▽

このシーンはフレデリカちゃんにばれずに救うと発生するレアイベントですね。

因みに私は速度特化で倒したので、フレデリカちゃんの視界に映らないようにしてから殺してみました。

と言うかこれが一番好感度が上がりやすいイベントなんですよね。真正面から救ってもあんまり好感度が上がりません。

まあペインに勝てる実力とルックスとレベルとステータスがあればそれで良いんですが……やる気起きないっす。

と言う事で一気に進んで別のイベント。【私の料理を食べてみて。3】です。

所で全く関係ないんですが、本当に関係ないんですけど視聴者兄貴に聞いていいですか？

……現実と味覚が同じゲームで、炭を食べた事がありますか？

「……ほら、食べてみて！大丈夫大丈夫！今度は失敗してないから！」

味見した？

ちよつとお腹が……

また失敗しちゃった？

↓頂きます。

「うん！召し上がれ！」

——一口掬って食べてみる。▽

——……▽

——システムエラー：ナンバー10。プレイヤーの気絶を確認、強制ログアウトまで10.9.8……

「っ!？」

「どうだった？今回は隠し味に砂糖を入れてみたんだけど」

「……とんかつに？」

「とんかつに」

どう考えても隠し味じゃない。

小麦粉の代わりに砂糖で衣作った？みたいなレベルだ。

砂糖サウダーファンダギー天ぷらに肉を入れればこんな感じだろうか？

他にも何か失敗してるだろうなあ…なんて考えながらも、私は頭をふらつかせながら笑顔を作る。

「……ありがとう」

「…あ。私、また失敗しちゃったんだね…」

↓そうだね。

大丈夫だよ。

—もし此処で責任放棄して大丈夫だよと言ってみる。▽

—するとどうなると思う？▽

……ペイン達に恨まれるだろう。

死にそうになった口の中を片付けながら、レシピ通りに作ろうと小

さく微笑みながら言う。

ああ、家のカロリーメイトが愛しい。

「そ、そうだね。レシピ通りに作れば……失敗はしない筈…」

—あの頃よりは上手くなっているし、と言う一言を聞いて…私は思わず頭を抱えそうになった。▽

—…じゃあどうして今回はレシピ通りに作らなかったのだろうか？▽

「ゲームと同じで、レシピに乗ってないことを試してみたくならない？」

なる。

ならない。

↓少しだけ。

「でしよ？だからさ」

—そういつてフレデリカは私の頭を膝に乗せる。▽

…そのまま向かい合うと…フレデリカが少しだけ恥ずかしそうにはにかみながら喋りだした。▽

—スチル『向かい合った私』

「……今回はごめんね？お詫びにこうするから……えっと、許してほしい……の」

—そう言いながら私に笑いかけてくれたフレデリカを見て、私も嬉しそうに笑った。▽

笑顔が可愛いね。

↓これからも作ってほしいな。

—お道化る様にそういうと、フレデリカが何時も通りの悪戯っ子の笑みになって喋りだす。▽

「おやおやあ？もしかして、私の膝がお気に入りなんですか？全くしようがないなあ翌檜ちゃんは」

—そのまま小さく、良いよとフレデリカが呟く。▽

「……もしして欲しいんだったら、こんな料理のついでじゃなくて……別に、いつでも……」

はい。

レアスチル『向かい合った私』を入手する唯一のイベント、【私の料理を食べてみて・3】です。

こういった風にフレデリカちゃんのイベントは“私”とついたイベントが多いです。但し地雷もまあまあ埋まっております、例えばあそこで笑顔を褒めれば好感度が下がります。

……まあ、常日頃から笑顔を浮かべてるフレデリカちゃんにも色々あるという事ですね。

因みに此処のイベントは数少ない本物の笑顔が見れる場所です。もし見たければ書きましよう。

と言った所で今回は此処まで、次回は【銀翼】戦からスタートです。では諸君、サラダバ！

「……何処行ったか分からなくなっちゃったね」

「そうだねー。でもサリーちゃんは明日山に登るって言ってたし、今から行ってみる？」

「……隠れる所もなさそうだし、山の上は寒そうだから良いかな」

寒そうなフレデリカに大丈夫？と問いかければ、大丈夫と笑いながら私の方に近づいた。

…そしてそのまま小さくえいと云った後に、私の身体を抱きしめた。

やっぱり寒かったらしい。

「ねえねえ。このままずっといるのも暇だし、一緒にゲームとかしない？」

「……寝ないと大変だよ？」

「……どうして寝るの？」

その一言を聞いて、私は苦笑しながら優しくフレデリカを抱きしめる。

…最初は疑問を持っていたフレデリカだったが、私が優しく頭を撫でるうちにどうやら疑問が飛んで行ったらしい。

ふわふわと夢心地になりながら、フレデリカは私を抱きしめてうっとりとする。

「……お、かあさん……」

「……」

「……んっ……だいすき……」

幸せそうに笑ったフレデリカを見ながら、私は優しくフレデリカの身体を横に倒して…そのまま適当なプレイヤーメイドのコートを三枚取り出して、フレデリカの簡易ベッドを作る。

…そしてすっぽりと入って眠りについたフレデリカを見てから、私はフレデリカの髪の毛を手で梳かした。

「……ん」

フレデリカがサリーの呼んでいたあだ名を真似したのは、自分の名付けに自信がないからだ。

…フレデリカが何時も笑みを浮かべているのは、それが一番だと判断したからだ。

そしてそのフレデリカに自信を持たせ、花道を歩くのを見るのがフレデリカルートだ。

「……りか」

前にフレデリカが自信満々に付けた自分のあだ名を呼びながら、私は優しく頭を撫で続ける。

…夜が更け、朝日が昇るまで……ずっと。

速度特化と銀翼

はい、よーいスタート。

世界で一番辛い銀翼討伐戦、はーじまーるよー！

前回は修羅場を見て速攻で逃げて速度特化専用のメダルを集めた所ですね。

取り敢えず山登りをしているメイプルちゃん達を見ながら、のんびりと進んでいきましょう。

此処でのんびりと行かないとメイプルちゃん達と一緒に歩いているノンケの漢が気付いてしまい、彼らとの戦闘が無くなってしまいます。

「か」

はい殺戮開始。

速度は修正でかなり下がっていますが、現在どのプレイヤーよりも最速です。

そんな奴が全力で突っ込んで剣を振り下ろしたらどうなるかなんて、分かるよなあ？

「…メダルは無し」

—倒し終わった後に彼らの足元を見るが、何も落ちていなかった。

▽

—メダルを持ってないのに襲い掛かった。…という事は、誰かに奪われた？▽

—…：手当たり次第ランカーに挑戦してるから無くなっただけだろう。▽

「っ！翌檜ちゃん！」

はい。

丁度良いタイミングで相手を殺せたので二人の好感度が上がりました。

この様に、しっかりとタイミング良く助けると好感度が上がってきます。

「…あいつは？」

「おやおやあ？もしかして私の事をお探しですか？さつきまで翌檜ちゃんの腕の中に居た私を？」

「……なんで捨ててこなかったの」「私の事猫か何かだと思ってる?!」

二人がキャットファイトしてるのを無視して翌檜ちゃんは黙々と山昇ってます。こいつ山とか昇ってますよ。やっぱ(RTA)好きなんですねえ。

山昇りRTAして、どうぞ。

「あ、ま…待って！」

「ちよ…わっ?!」

取り敢えず後ろの三人が足を取られているのを見つつ、ちゃんと魔物等を倒しつつつろーぷを岩に巻き付けます。

幾つかの岩は壊す事が出来ない岩なので其処に対してロープを巻けば、あの三人が移動に手間取らずに時短になります。

魔物を倒し、三人にバレない様に手助けをしておき…そして中ボスである雪猿は…

「【多重炎弾】」

フレデリカちゃん一人に任せておけばかなり時短になります。

やっぱりランカーがナンバーワン！

因みに此→処←、三人で戦うとサリーちゃんが勝手に一人で戦って超加速切って戦うので、割と迷惑ポイントです。

ちゃんと連携で倒して、どうぞ。

—頂上へたどり着くと…其処には誰もおらず、白く輝く魔法陣が置いてある。▽

—取り敢えずその魔法陣に入り、私達は転移をすると…円形の広間が見え始めた。▽

—それを見て私達は警戒を露わにしながら、一步一步しっかりと歩き続ける。▽

—次の瞬間…▽

「…っ?!」

先ず初めにフレデリカちゃんをお姫様だっこして、そのまま後ろへ

下がります。

これをしてないとフレデリカちゃんが速攻で死に、結局時短になりません。

今回は其処まで翌檜ちゃんが出来る事は無いので、今回は諦めてフレデリカちゃんを抱きかかえながら走り回りましょう。

「…っ!?ちよ、ちよっど…」

「鳥系の敵だとうしようもないから、フレデリカ…おねがい」

「…う、うん！任せ…」

「来る！」

魔法陣から飛んでくる氷の氷柱は、実は固定化されています。

なので氷柱を蹴りながら鳥の上を取りつつ、片手で剣を打ち付けながら背中を走り回ります。

止まったままだと死にます。

「【多重炎弾】！」

—フレデリカの攻撃によって、体力が少しだけ減り始める。▽

—それを見た二人が小さく頷いた後に…メイプルがゆつくりと短刀を持ち換え：▽

「「っ!?!」」

—地面に巨大な魔法陣が広がり、大量の棘が広がり始める。▽

この攻撃は背中に居ないと即死です。

なので氷柱を足場にする以外生存の道が無かった訳です。：逆に言えば、この攻撃をされてる間は攻撃し放題です。

と言っても現在の攻撃力的には其処まで与えられる物ではないです。1.5割ちやんと削れたので【跳躍X】を使ってさっさと離れましょうか。

このまま上に居るとヘイトを奪い取ってしまいメイプルちゃんの方に行かないので、さっさと離れて体力を削らせるに限りませう。

「…ぐうう…」

—メイプルと怪鳥が互いを倒すべく鬨ぎ合う。▽

—やがてメイプルが全力で盾を振り払うのと同時に…争っていた怪鳥の足が吸い込まれ、そのまま体力が三割程削れる。▽

—そのままメイプルが弾き飛ばされるのと同時に、短刀から【毒竜】が現れ怪鳥に襲い掛かる。▽

「どうだ！」

でた！メイプルちゃん十八番の【毒竜】！これは…勝ったな。風呂入ってくる。

じゃ、後卵貰って帰るから。このへんにい、上手いゆで卵屋があるんですけど。じゃけん…

—怪鳥から凄まじい冷気が発せられ、怪鳥を覆っていた毒が凍りついていく。▽

—そして、それはパリンという高い音と共に割れてキラキラと輝いて落ちていった。▽

…はい。戦闘再開です。

残りの闘いですが、どうせこの状態でも普通に余裕なので此処で終わりにします。

此処のペット達は二人の方が上手い使い方出来るって、それ一番言われてるから！

次回は邪剣・夜のメダル集めから始まります。

では諸君、サラダバ！

「HPバーが一割しか減ってない!？」

「嘘…！」

私達の決死の攻撃は、あっさりと雪の結晶の様に壊れてしまう。

【毒竜】を使ったのに、なんて考えながらも…私はフレデリカを抱えて走り回る。

次の攻撃は…

「っ！棘が集ま…」

「舌噛まない様にして！…いくよー！」

先ず初めに【跳躍X】を発動させ、天井に足をくっ付けてからもう一度【銀翼】の頭を踏みつけて背中に着地する。

そのままメイプル達を攻撃している【銀翼】の方に攻撃をし続けながら、私達は攻撃が終わると同時に標的へと変わる。

「…っ」

「大丈夫。絶対当たらないから…信じて」

「…うん！【多重…】」

全員の声を気にしない様にしながら、私はゆつくりと剣をしまつてから微笑む。

ゆつくりとMPポーションを口に含み…そのまま駆け出す。

突進と共に大量の水柱が降り注ぐが、隙間が多いので同じ要領で飛び上がりフレデリカの援護射撃によって体力バーが減っていく。

全力で走る事で暴風の範囲からすぐに抜け出し、そのままフレデリカのMPをちらりと見つめる。

【ヒドラ毒竜】！

【ウインドカッター】「ファイアボール」！

【多重炎弾】！

三者三様の攻撃を見ながら、私は厳しい表情を浮かべる。

…ペースは十分、でもヘイトの取りすぎで一割の条件を満たせないから…うん、行動を早めよう。

フレデリカに口の中に入れてたMPポーションを飲ませつつ、速度を使ってメイプルの傍にフレデリカを置く。

「っっ!?!?!?!」

「…来るよー!」

そのまま私は【跳躍X】を発動させ、魔法陣を発動させようとしている【銀翼】の爪を斬り落とし首に剣を突き立てる。

そして瞬時に魔法陣を発動させようとした瞬間、全体重を左の首に押し付けて…そのままレーザーがメイプルの傍に撃たれる。

「…これで【悪食】の使用回数は2回…不慮の事故も考慮しなければ…よし、好タイム狙え…」

「なっちゃん!」

「っ!?!」

首に引っ付いていた私を無理矢理引き剥がした【銀翼】は、私に対

して大量の礫を撃ちだす。

剣を使い、礫を避けようとした瞬間：利き手が軽い事に気付き思わず止まってしまった。

「…あ、剣が…」

【超加速】！」

「っ！」

サリーの声と共に私は一瞬で弾き飛ばされ、サリーに対してヘイトが向き始める。

それと同時に…

【超加速】

首元から剣を引き抜き、そのまま【銀翼】を攻撃しつつゆっくりと笑みを浮かべた。

礫を避けながら【スラッシュ】を入れたサリーをみつつ、私は【毒竜^{ヒドラ}】を発動させたメイプルの傍に近寄る。

「さ、さっきのアレ！何!?!」

「さっきの…?さっきのつてどれの」

「勿論急にフレデリカさんに口付けをした事だよ！なんで急にあんな事…」

「メイプ…」

「危ない！翌檜ちゃん！」

フレデリカの声と共に、盾を構えておらず後ろに悪食のない大楯を背負っていたメイプルが弾き飛ばされる。

……そうだ。まだ戦闘ちゆ…

「っ！」

気付けば形態変化していた【銀翼】を見ながら、私はゆっくりとした世界を眺め…そして一つの結論に辿り着いた。

…あ、これ…死…

「メイプルウウウ！」

「…っ【カバームーブ】っ！」

サリーの声によって、私の目の前にメイプルが【カバームーブ】を発動させる。

それをぼーつと見ながらも、私は小さく息を呑むのと同時に……目の前に居たメイプルが小さく息を吐いた。

「カバー」アアアアア！」

体力の一割なのにも関わらず、【悪食】が残った盾をメイプルは構える。

…【悪食】があつたとしても、体力は減る。どうしようもないこの状況でも守ってくれるメイプルは…

「…サリーー！フレデリカさん！」

「ファイアボール！」

「多重炎弾」

それでも楓は倒れなかった。

声を上げて、体力を1だけ残して…嬉しそうな声で名前を呼ぶ。

…それと同時に【銀翼】の姿が掻き消え……

「…おわ、った…？」

私達は倒れる様に、その場に座った。